
美童好みの女神の逸話

みねお涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美童好みの女神の逸話

【Nコード】

N8948M

【作者名】

みねお涼

【あらすじ】

その村の又シは、見目麗しい童を好む神だという。ある季節。村は、危機的な豪雨災害に見舞われていた。土地の又シが怒り、童を求めている。

村人たちにより差し出された少年は、1人又シのもとへと歩く。自分の存在意義を確かめる為に。

しかしそこで出会ったのは、少し変わった趣味を持つ女神で…

宗次とサトミと女神の出会い

序

まだ、夜は明けていない。

湿ったあぜ道を、何人もの足音が通り過ぎていく。
静かに。

まるで何かから、隠れるように。

誰も、何も言わなかった。

固く閉ざされた口。

心もまた、かんぬきのかかった戸のように重く閉じられていた。
人々はしばらく歩き、一層闇の深い山に分け入っていった。

「どうか、我らが土地に平穏を…」

山の下生えを踏みしめた多くの人影が、それぞれにささやいた。
ひとつの輿が下された。

簡素なつくりの、藁で覆われた、とても簡易的な輿であった。

2

人々は、輿の輿、山の深淵に向かい一礼をした。

あとには。

不規則で、短い吐息と。

真つ暗な夜だけが残った。

壱 宗次とサトミと女神の出会い

「又シ様が、贅を欲しがっておられるのです…」

山間に切り開かれた集落には、およそ50戸ばかりの家が建ち並

んでいる。

この大井村に異変が起こったのは、一月前の豪雨の後からだっ

「又シ様の祟りじゃ！」

村人たちは、口々にそう叫んだ。

まれにみる豪雨の被害は、本来土地を守るべき又シが、村に対して祟っているのだと。

大雨で、田植え前の田畑は土砂に埋没した。

山は多量の水分を支えきれずに崩れ、木々は耐える力もむなしく身をたおすしかなかった。

「元来、この時期は雨が多い…。又シ様が贅を欲しがっておられるなど…」

村を一望できる小高い丘の上に、この村を治める豪族の屋敷があった。

今、その屋敷の中の一室で男女が向かい合っている。

「しかし、これでは税を納めることができませぬし、何より我が家が対策を示せば、民も安心できますよう？」

50歳を目前にした男の名は大井頼里。この大井村を開墾した土着の侍の子孫であった。

頼里は、イライラと爪を噛む。

そんな彼の前行儀良く座しているのは、数年前に嫁いできた女名は、とら。

年は二周り以上違う。後妻だった。

「又シ様は、お怒りなのです。男の子を差し出さぬかぎり、村の田畑は全滅してしまいますよ？」

「お前まであの伝承を信じているのか？又シは、見目美しい童を好むと」

「ええ。少なくとも平安の昔にはそのようにして村が救われたと聞

き及んでおりますが？」

二人の間に灯されていた紙燭の炎が、不気味に揺れた。

「ぬえの…子を差し出せと？」

大井家には、頼里と前妻の子がいた。

「しかし…あれは私の跡目を…」

「跡目には我が子八千代丸を」

頼里は、去年生まれたばかりのおさな子の顔を思い浮かべ眉根を寄せた。

「うむ、しかし…」

頼里は俯いてうなづいている。

だが、もう爪に齒を立ててはいなかった。

「あの子のことは心配要りませんわ。…だって、良い子ですもの」「とらの唇に引かれた真つ赤な紅が、不快なほど釣りあがったのに頼里は気付かなかった。

…

わずかな月光も闇へと変えていた深い山林は、全体的に明るさを取り戻していた。

日の出だ。

輿の中で、少年はいつの間にか寝ていた。

朝露のにおいに身体を起こすと、少々背中と首が痛んだ。

ゆっくりと輿から這い出して、森の中を歩き出す。

腹がすいていた。

だが、言い渡された目的があった。

又シの棲む沼へ行く。

山の奥深くにあるという、見たこともない沼。

歩む足取りは重い。

うつそうとした木々の為、はつきりと太陽は拝めなかったが、歩き始めてもう幾分も時間が過ぎたように感じられた。

僕に出来る事なんて、何も無かったのか…？

いくら良い師範をつけても、剣術の技はそこそこにも身につかず、学問にしても字は美しいが覚えが悪いと呆れられた。

畑仕事をしようにも同じ年代の子供に比べ体力がなく、すぐに腰をつく。

父頼里と母ぬえは、そんな我が子でも目をかけていたが、ぬえが病に倒れ他界した後大井家に嫁いだとは、たいして役にも立たない前妻の息子を疎ましげに見ていた。

そんな継母に、村のためだと言われ、父にも頭を下げられ、村人に崇められて又シの住むという山に入ったが：

それらしき沼を、一向に見つける事が出来なかった。

少年には、このまま又シの山で誰に知られることなく朽ち果てる自分の姿が見えていた。

又シ様には会えなかったけど、みんなを安心させることは出来たかな：

少年はそう思い直し、そのまま近くの木の根元に腰を下ろした。限界だった。

「誰ぞ？」

突然かけられた声に、少年の肩が跳ねる。

こんな山奥に、人がいるわけではない。

恐る恐る声のした方へ顔を向けると、そこには少年とそう変わらない年頃の男児が立っている。

その姿は凜として、清らかで、多くの子供たちがそうであるような、丈の短いが身ごろのある衣ではなく、菊綴の鮮やかな水干を身に纏っていた。

「誰ぞ、と問うておる」

その口調からも、そこらの農民の出ではない事がうかがえる。

「…大井…大井、宗次」

少年は、生贄として差し出される前に与えられた新たな名を名乗

った。

水干の少年は、おずおずと答えた宗次を見下ろして、同じ年頃の子供には不似合いな威圧感を放っていた。

「なぜ、かような場所におる」

見下す目には、感情が見出せない。

「おい、サトミ。そのように威嚇するんじゃないよ。可愛いそうにおびえているじゃないか」と。

そこに別の声加わった。女の声だ。

だが、姿が見えない。

水干の少年　サトミは、見えない何かに向かって頭を下げると、一歩後退した。

「うわーっ！」

その瞬間。

宗次は間抜けな悲鳴をあげていた。

サトミが退いた空間に、ふよふよと中空に浮遊する女性が現れたのだ。

それも、逆さまの格好で。

「おや、驚かせたか？すまないね、少年」

女性は、宗次の知らない満足感を得て笑った。

年はとらとかわらないくらいだろうか。

いや、そもそも人間であるはずがなかった。

「あなたが…その…童を贄に求める又シ様ですか？」

「いや、待て。その噂、誤解だから」

いきなり宗次の前に現れた女性は、困ったように笑う。

「私はこの先の沼に住む龍神じゃ。この土地の又シではない」

「…では…」

宗次は、困惑して二の句をつげなくなる。

探していた又シではない、と。

「まあ、こんなところで話すのもなんだな。サトミ、案内せよ」

「かしこまりました。童、こちらへ」
状況が飲み込めないまま、宗次は無事に目的の沼へと案内されることになった。

宗次は、沼のほとりに佇む祠へと招かれた。

祠といっても、流石神の住む場所である。中は外見よりもはるかに広く、居心地は良い。

が、殺風景で囲炉裏すらない。

いや、神が普通に食事するとは思えないが。

「お前、見たところ年頃は1、2、3だね？なぜこんなところまで来たんだい？」

その問いは、サトミにも聞かれたことだ。

「女神様は、童がお好きだと…。それで」

「確かに！童はよい！お肌もきれいだしね、大きな瞳が潤んでいようものなら最高ではないか？細くて指どおりのよい黒髪にほほを寄せてみようものなら、幸せを独り占めって感じ？」

女神は目を輝かせ、妄想の世界へと落ちていく。

神が興奮などと人間くさい感情の変化を見せていることに、宗次は我が目を疑い、同時に神という存在の概念を嫌が上にも刷新せざるを得ない。

宗次にそんな革命的な思考変革をさせた女神は、頬を紅潮させさらに自分の世界へと入り込んでいく。

「つややかな黒髪！一見して気の強そうな目に雪のように白い肌！適度にふくよかでやわらかい頬と丸みの残るあご筋に形のよい唇がそろえば、次はすつと通った鼻筋！きめの細かい肌に覆われた首筋と体！細い足と腕に秘められた男の強さもまた魅力的だね」

バチン、と。

乾いた音が室内に響く。

宗次があっけに取られながら女神の話に耳を傾けていると、サトミが勢いよく女神の頬を張り倒した。

張り倒されたほうの女神は、「うつ」と小さくうめき声をあげてそのまま板間に倒れこんだ。

あまりの所業と結果に、手を出したサトミや倒れた女神以上に、宗次が肩を震わせた。

「宗次、こういう時は遠慮なく叩いて差し上げなさい。冗長されては進む話も進みません」

「はあ」

呆れた様子で薄い眉を寄せ、サトミはそう忠告した。

「ああ！」

そんなサトミを見て、宗次は納得し手をたたいた。

「女神さまの理想の童って、サトミさんなんですね！」

途端、サトミの顔に朱が挿したのを宗次は見逃さなかった。

そして、女神も豪快に笑い声を響かせた。

「あつはつはつはつはつはつは！かわいいよね〜？サトミって」

「お止めくさだされ！それよりも、なぜ宗次がこの地にやってきたのか、お尋ねになられたのですか！？」

いささか不機嫌になったサトミが、女神に当初の目的を思い出させた。

「あ、忘れてた」

サトミは何か言い返そうと口を開くが、女神があまりにもものううと言うので、そのまま何も言わずに口をへの字に曲げた。

最初に山へ入った理由を聞かれてから、だいぶ時間が経ってしまっていた。

「村の畑が、ここ最近の雨のせいで大きな被害をこうむりました。その雨は、山の又シが…お怒りなのだ…」

村の惨状を思い出したのか、宗次は伏目がちにした瞼の下で視線を泳がせた。

「だから僕は、村を守るためにやってきました」

俺は、贄なんだ

「又シは美童がお好みとの言い伝えでしたので…」

沈んだ空気を払拭するような女神の聲が発せられたのは、その時だった。

「何を申すか！又シが好んで守護する土地の田畑を荒らそうか！？私が又シだとしても！童が欲しければ自ら出向いて攫うくらいの事をしておるわ！」

僕の事は好みじゃないのかな。まあ、サトミさんに比べたら駄目なんだろうけど

声を荒げる女神。

「顔を上げよ！だからお主たちは私が美しい童を求めて雨を降らせているのだと思うたのか？浅はかな！」

女神も、最後は怒りというよりも村人の考えを嘆いているようで、悔しそうに下唇を噛み締めた。

しばらくの沈黙のあと。

「左様、私は雨を降らすことも容易だが…！」

女神ははつきりと宣言した。

「村に何が起こっているのか、お前教えてやろうか？」

宗次と女神と宗次の気持ち

最近斜面が決壊したのは、大井村の南東の斜面だった。そこは、日照りがよくないせいで、一向に乾燥しない。

「これはひどい。収穫が台無しではないか」

山の斜面から田を見下ろし、女神は重い表情で倒れた稲を見下ろしている。

女神は、明らかに収穫の見込めない田をよく観察した。

決壊したという、山の斜面も。

宗次の心臓は、静かにだが確実にその拍動を早めていた。

田畑の被害が、神の起こした雨のせいではないというのなら、一体何者がそうしたのか？

何者が…？

そう考えた自分に、宗次は笑った。

まさか村の誰かが、という“何者”という言葉に秘められた馬鹿げた可能性を振り払うために。

そうだ、動物かもしれない。もしかしたら夜盗かなにかがいたのかもしれない…

「……」

そんなこと、ある訳ない。

宗次がそうして悶々としているうちに、女神は、崩れた斜面の様子を見ながらぶつぶつとつぶやいている。

「少年！」

女神が宗次を呼んだ。

「ここに来てみる！面白いものが残っているぞ」

宗次は、慎重に崩れた山腹を移動し、ちょうど土の抉れた斜面の真上に来た。

「ここだ。よく見る。お前、これがなんに見える？」

「……鋤、ですか？」

「ああ。道具は何か判らぬが、板状の何かで削ったようなきれいな跡だな」

確かに、ある程度幅のある板か何かを突き刺したような形状が、雨に流されることなく残っていた。

それは、雨が溜まり、土をさらいながら流れるよう広い範囲にわたり溝として掘られた形跡。

斜面が決壊した時は、神の祟りだと言って誰も近づこうとしなかったから、発見されることもなかったのだ。

「人の、したことなんですね」

妙にすんなりと事実を受け入れる宗次に、女神は片眉を吊り上げた。

「見当でもついていたか？」

「はい…。女神様がお怒りになった時から、もしかしたらと」

握り締められた宗次の両手が、小刻みに震えていた。

「お前、家に帰ってもいいよ？」

「え？」

「別に、私は贄を求めていたわけではない。この噂も大概偽りなのだが…。ま、当然帰ると言っても私に止める権利はないのだよ？」

ああ、やっぱり俺は女神様の好みではないんだな…

頭の隅ではそんな事を考えながら、

「でも、村人が…」

宗次はためらった。

村人は、宗次に期待していた。

これ以上、災害が広がることのないようにと。

宗次の脳裏には、継母とらの顔が浮かんでいた。両端が引き上げられた、真っ赤な唇が。

女神は、歯切れの悪い宗次に痺れを切らして怒鳴った。

「ええい！うじうじするな！するならもっとう儂げに！相手の同情を誘うような潤んだ瞳で上目遣いだ！」

怒る点がずれてはいたが。

頼里の部屋には、今年取れた果物や、乾燥させた魚、その他被害を免れた農作物の類、村人が副業として営む藁細工などが届けられていた。

その「供物」に埋もれて、頼里は額に汗まで浮かべて苦悶していた。

そんな男の傍らで、とらが笑んだ形の口元に濁った酒を運んでいく。

「何をそんなに悩んでいらっしやるの？」

「こんなもの、宗次と引き換えに手元に置いてよいものか……」

「何をおっしゃるの？あれ以来厄災も起こらなくなつて、村の者たちは感謝しているのです。その気持ちを無下にするほうが、あの子のためにもならないではありませんか？」

とらは小袖の襟を正しながら、頭を抱える頼里の部屋を辞した。

頼里の部屋から十分に離れた所で、

「あの男は支配者に向かぬ……」

と、夫の苦悩するさまを鼻で笑った。

自室まで戻ると、控えていた家人を遠ざけ、火もともさずに再び酒の入った杯を傾けた。

「邪魔な跡取も素直に山に入ってくれたし、このままうまくいけば……」

自分の思惑通りに事が運んでうれしいのか、とらはくすくすと女性らしくしとやかに笑った。

「村の誰にも文句を言われることなく、この家は私の息子の物……」

家を継承するということは、実質的村の統治権をも掌握するということ。

今は落ちぶれた地方豪族ではあるが、土地ごと大寺院に寄進するもよし、幕府に収めるもよし、京の貴族か皇族に寄進するもよし……。

そうして徐々に力を付けていけばよい。

「おほほほほほほほほほ」

この一部始終を見ていた一団があった。

一団といっても、祠に帰ってきた女神、宗次、サトミの三人であるが。

どこかで湯を沸かしてきたのだろう、宗次の膝元には湯気のみならず、白湯が置かれている。

他の二人の分は用意されていないことから、やはり普通に人間と同じような食物摂取をしているわけではないようだ。

ある意味、作物の良し悪しに左右されない事はうらやましい。

「何ということでしょう」

サトミは嫌悪を示し顔をそむけたが、みな視線が集まる中心には水が張られた素焼きの甕があった。

座っていて、ちょうど覗き込める高さのその甕に入った水の水面には、先ほどから大井家の様子が映し出されている。

甕の水は、女神の住む沼のものだという。

こんな便利なものがあるのなら、わざわざ決壊した斜面まで出向く必要もなかったのでは？と思ったが、宗次はそれを口にしなかった。

すぐに自分の世界に飛び込み、事の順序を忘れがちだという女神だが、まさかこういう道具があったことまで忘れていた、などとは考えたくない。

「この女は？まさか母か？」

女神の問いに、史憲はぼそぼそと答える。

「継母です」

「だろうな。まったく同じ血というものが感じられない……」

「俺の母が他界して、すぐに嫁いでまいりました。でも、村人には嫌われています」

「でしようね。このような性格ならば頷けますよ」

本気で嫌そうな顔をしたサトミが横から口をはさむ。

「十中八九、この女が首謀者だな。人為的に土砂崩れを引き起こさせたのだろうよ」

女神は、じつと水面を見つめつづける宗次に言った。

「お前、この女の策略に乗せられて私の元に来させられたのだよ？無事帰って肝を冷やさせてみるのも一興じゃないか」

「俺は……このままでよいのです。俺が女神さまの好みでないことは承知しておりますが……」

「おい、いつそんな事を言ったよ」

「あれ？違うのですか？」

「……少年は良い！」

「あー、ごほん」

キラッ

と目を輝かせ、はつらつと言う女神の言葉を、サトミが妙な咳とどの慣らしで牽制する。

「……いや、本当に、家には帰らずともよいのか？」

ははは〜とサトミから視線をはずしながら、女神は再度帰宅を薦める。

「帰りたくありません」

先ほどまで自身なさげにぼそぼそしゃべっていたのとは異なり、宗次の声ははっきりとしていた。

「は？」

「あんな風に邪魔だと思われているのは知っていました。俺は、何ひとつまともできない益暗でしたから」

「だから、言われるままに贄になったと？」

「あの家にいても、俺にできることはなかった。何も期待されなかった。だから、俺がこうして女神様の元に来ることで村の為になるなら、それでいいと思ったんです」

うつむいて、組んだ足の上でこぶしを作って。

宗次はゆっくりと、語った。

「どんな思惑があつたにせよ、俺が一人山に入ること、村は、村人は安心することができた…。だから、今更帰ってしまったらまたみんなが不安に思ってしまう…」

宗次の、肩から背にかけて大きな重しが乗せられている。

サトミの目にも、ましてや女神の目にもそのようにしか見えなかつた。

サトミが、すっかり冷めてしまった宗次のための湯を取りかえるため、水がめを囲んでいた輪から抜けた。

サトミが気を利かせて席を外したように感じられた。

宗次の緊張感が高まる。

おそらく、女神様に何か言われる…。また、怒られてしまう…。体が凍っていくようだ。

以前。

とらに、「お前は口がきけないの？」と皮肉を言われたことがあつた。

村を治める首長となるため、自分がするべきことは何だと問われた時。

幼い頃から、お前は私の跡を継ぐのだと教えられつづけ、思い描いていた村の未来はいくつかあつた。

でも。

その頃にはもう、何一つ人並みに出来ない子だと陰口をささやかれ、自分の意見すらまともに口に出せなくなっていた。

お前の意見など、人並み以下だと笑われてしまふかもしれない。

そんな根拠の無い不安が、幼い少年の口を貝にさせていた。

村の人たちの、言うようにしたい。

そう言つて俯いていたら「人の言う事にしか従わないのか」と、怒りとともに嘲笑われた。

怖くなつた。

意見する事も、される事も。

「…では、一生私の下でしなくても良い奉公をするというのか？」

祠の内部に響いた神の声は、まっすぐに宗次の体を射抜いた。
衝撃に、跳ねる様に面を上げた。

「……今宵はもう休むがよからう……」

女神は、それ以上何も言わなくなった。

宗次とサトミとサトミの告白

東の空に照る月は、この夜は宗次の姿を闇の中に浮びあがらせていた。

南に傾いだ、仲秋の月。

僅かばかりの風で梢が囁き合い、地面の枯葉がもの悲しそうにつぶやく。

宗次は、どこを見ても無く沼の辺に座りこんでいた。

膝を立て、そこに顎を寄せ、顔の周りを囲うように腕を回して。

沼は暗く澱んで何も映し出してはいなかった。

俺は、このままここにいてもいけない…

それは確信。

求められた贅ではないのだから。

「どうしたのです?」

いつの間にか、宗次の傍らにサトミが立っていた。

「冷えますよ?」

そう心配してくれているのだろうが、いかんせん彼の表情は作られた人形のように感情が見出せない。

外見は宗次と同じくらいに見えるが、そもそも神に仕えている時点で人間ではないのだから、年齢は外見に比例などしていないだろう。

ただその尊大な態度と、見受けられるあらゆる所作からよほど高貴な人柄がうかがえた。

「あの、俺はここにいたらいけないんですよね?」

「なぜ、そのように思う?」

「女神様が、帰れとおっしゃる」

「あなたのことをお考えになっておられるからこそ、そのように申されるのだ」

「わかってはいます…。でも、俺はあの村にも居たくないのです」
言ってしまうと、宗次は強く自分を抱きしめた。

サトミは、何も言わずに宗次の横に座った。

「このような事態になってしまったのは、私にも責がある」

サトミの告白に、宗次は関心を引かれた。

涙に潤んだ瞳にサトミの美しい横顔がうつる。

宗次の頬は寒さのせいか、ほんのりと赤くなっていた。

睫が涙でぬれて、月のか細い光を反射している。

もし、隣にいるのが女神だったら、胸の一つも高鳴らせていたかもしれない。

「あの方が少年好きだという噂が広まってしまったのは…まあ、外れているというわけでもないのですが、かつて、私が贅として捧げられてからのことなのです」

「……」

「そうですね、もう大分昔の話になるのですが……」

サトミは、遠い時代を思い起こした。

自分が、まだ「人間」として生きていた時代。

「これは山の又シに供物を捧げるのがよろしいのではないかと」

開墾したばかりの村は、作物の根付きが悪かった。

山を切り開き、財を築けると期待していた大井某という一地方役

人は、都の邸宅にてその進言を聞いていた。

開墾を指揮した自分の名を取り、大井村と名づけたその土地からの収穫をあてに、都で名を馳せようと意気込んでいたのだが…

「しかし、一体何を捧げれば又シ殿は我に土地の財貨を分けてくださるか？」

開墾の際、特にしきたりを犯したつもりはない。

だが、作物が育たないのなら何かの手を講じなければ、一家の生

活がかかってくる。

宮中に参内できる身分でも、幕府に奉公できる伝手も兵力もない。今はただ、機会を待つばかり…。

何としても自分の土地だけは守りたい。

子々孫々受継がれていく土地なのだから。

「やはり、こちらもそれなりのモノを用意せねばならぬかと存じ上げます」

「して？」

「若き、人間を人柱に」

そうして幾度かの寄り合いが設けられたが、一向にその「人柱」が決まらない。

家人や郎党の中から選んでもよかつたのだが、あまり身分が低いと又シもお怒りになると、議論は硬直していった。

生贄に若者を探している豪族がいると、都に噂が立ち始めたのはすぐのことだった。

自分の、もしくは共通の財産を守るために人間を選定することは稀ではあるが、非道ではない。

大井某に密かに連絡をとるものがあつた。

牛車に揺られ、右京の南、大井家に現れたのはおそらくよほど名のある貴族。

もしかしたら皇族やもしれぬ。

そう思わせるほどにピリピリとした嫌な雰囲気があつた。

わざわざ用意させた御簾の奥で、その顔も名も明かさぬ者は従者を介し、一つの申し入れをした。

「不要な者があるんや。そちにやる…。煮るなり焼くなり好きにつこうたらよろし」

そうして、麻の袋の中で眠らされている少年が庭に残されたのだ。

「…それが、サトミさん？」

「そう。運ばれている途中何度か意識が戻ったが、すぐにまた眠らされた。目がさめたら、こうなっていた」

サトミはそう言って、自分の今の状態を示唆した。
生身の人間とは異なる、在り様を。

「どうやら、寝ているうちに沼に落とされたらしい。最初、自分が死んでいるのもわからなかった」

語るサトミの横顔が切なげに見えて、宗次はどうしようもなく胸が締め付けられた。

不要と、宣言されてしまった彼を哀れだと思った。

哀れだなどと、簡単に思われても不快だろうが、宗次はただただ悲しくなった。

「私はこちらに見つけられた…。女神は…私を見つけて何と申されたと思う？」

サトミの顔には、苦笑が浮かんでいた。

その表情はあまりにも年相応の少年らしく、語られた昔というものがどれほどのものなのか、推察できない。

きっと、それはサトミの「時間」が女神の…沼の龍神の従僕となつた日に止まってしまったから。

「あの方は、私を見るなりこういわれた」

『おお！なんと美しい男おのこじゃ！』

「あはは」

簡単に情景が想像できてしまって、笑うしかない。

サトミが語った女神はこうだ。

沼に現れたサトミを見ての第一声は先に述べたが、彼が山に現れた経緯を話すと、女神は泣いて慰めたのだという。

『こんなかわいい子供を、要らぬと切り捨てるとは！人はそれ程に追い詰められておるのか？』

沼の辺で二人きり。

女神はサトミのために泣いた。

サトミは、乳母以外で初めて自分の為に泣いてくれている、このおかしな龍神にささやかながらの敬意を持った。

『二度とこの様な事が起こらぬよう、私がしかりと村を護ろうぞ?』
それ以来、女神は村を護り、サトミを側に置いた。

この事により、はからずも「少年を差し出せば厄災は除かれる」

Ⅱ「女神は少年を好む」という言い伝えが残る事になったのだ。

話しを聴き終えて、宗次は気になっていたことを質問せずにはいられない。

「女神様は…、サトミさんにもいいと…、ここにもいいと許されたのですか?」

その疑問を耳にして、サトミはうつすらと微笑んだ。

永遠となった少年の美貌が、夜空の光を全て引き寄せて輝く。

呼吸を忘れてしまいそうになった宗次は、その笑みを肯定ととった。

「俺は！何が足りないのですか？女神様の好みではないからですか?… 一体… どうしたら良いのです!？沼に身を投じ、死ねばよいのですか!？」

サトミは宗次の視線を受け止めたまま、しばらく無言だった。

すぐるようなその瞳を見下ろす態勢で、彼は一言だけ導を与える。

「自ら、考えるが宜しかろう」

宗次を残して祠へと帰るサトミの背中へ、すぐに形を失う。

宗次は沼の辺に腰を落としたまま、月光を弾く眼で闇を見つめつづけていた。

長年の住処に戻ってきたサトミを迎えたのは、沼の主である女神だ。

「いささか、しゃべりすぎていたようだね?」

腕組みをして、からかうような口調で問いかけた。

年中に纏っている薄布から伸びた足は、だらしなく板間に放り出されていて、サトミのため息を誘発する。

「…あなたの第一声のあたりですか？」

相変わらずの無表情になったサトミが、女神好みの目を細めて言い返した。

「ふふ。同じような境遇で、同情でもしたか？」

「同じではありません。少なくとも、彼は生きている」

やわらかに表情を緩めて、サトミはそう言った。

女神も、満足そうに目を輝かす。

女神が、サトミの態度を好ましく思ったからなのは、考えるまでもない。

宗次と女神と宗次の決意

……

明け方になって、宗次の姿が見えないことに気付いたのはサトミだった。

探しに出ようとするサトミを制し、女神は言う。

「大丈夫だ、私が行こう」

女神は身に絡みつくような衣を翻した。

女神にははつきりと史憲の居場所が見えていた。

まだ、森の中にいる。

山中に張り巡らしている感覚の糸が、少年の息遣いを捕らえていた。

宗次は、森の切れ目に立ち尽くしていた。

じっと森の先を見つめている。

「この森を出ても、またあなたに会えますか？」

「お前に、その気があれば、だがね」

背後に立つ龍神の気配に、宗次は気づいていた。

人の住む場所と、人の住まない場所とは、明確に境がある。

それは山であったり、海であったりするが、人々はこの境から先の空間を人の住む常世とは大概区別し、特別な界域と考える。

山に入るならば、その山の一部となる可能性を覚悟しなければならぬ。

だから、それが贅になるという目的ならば尚のこと、導きも無しに出入りすることは相当な勇気が必要とした。

宗次は、女神の言葉を導に、一步、片足を踏み出した。

「少し、行ってきます」

女神が見守っているのを背中で感じながら、もう片方の足も前の足に揃えた。

今、宗次の体は山の領域外にある。

自分に託された役目を一時捨て、自分のやるべき事をやるために。「昨日、サトミさんの話しを聴いて気付いたんです」

「何をだい？」

「俺は、人の言うことにはかり気にして、自分で考える事に臆病になっただい……」

「そうかい？私を知る限り、そうでもないよ？」

「……ありがとうございます。でも、伝えるべき相手に伝えなければ、意味の無い事なんです」

贅として捧げられる事は、村を救う事になると自分に言い聞かせた。

必要とされているのだと、都合よく解釈した。

逆らう事無く、偽りの愛情と哀惜を信じた。

「帰ってきたいと思っっています」

走り出す間際、宗次は穢れの落ちた顔を見せた。

磨けば良い美童になるなあ……

幸か不幸か。

宗次は女神のそんな邪心に気付かずですんだ。

始めは。

何が起こっているのか理解できる者は居なかった。

村を救うために山へと見送った大井の少年が、五体満足で村に舞い戻ってきたのだ。鬼神の類でない事は、土に落ちる影が証明していた。

それがどれほど恐ろしい事なのか、現場にいる災厄の当事者にか解るまい。

宗次は、恐れおののき農作業を中断する村人には目もくれず、自分が生活していた屋敷へと歩いた。

つい最近まで自分がいた地位にいる幼い弟を追い出そうなどとは

思っていない。

ただ……。

村の誰かが知らせたのだろう、屋敷の門の前には父頼里ととらが数人の家人を従え待ちうけていた。

「どうした事だ？…又シはお前をお気に召してくださいさらなかったのか？」

傍から見てもそれと分かるように、頼里の体は打ち震え恐怖していた。

だが、それでも我が子には変わらない。手を差し伸べようとする頼里を、

「お止めください！あの者は一度なりとも山のものとなった身！御身まで引きずられますぞ！？」

とらの叱責が止めた。

「ふん！よくも帰って来れたものだね？さつさと沼に入水すればよかったものを」

とらが、ハッキリと宗次を倦厭した。

「とらさん……」

宗次は、とらを「母」とは呼ばなかった。

「一体誰に頼んで、田畑を荒らしたのですか？」

責められる事は気にせず、宗次は明かさなければならぬ事を簡潔に尋ねた。

とらが息を飲んだ。

「な、何を？誰が？あたくしが……？」

とらは、宗次の問いのおかげで、平静を装えなくなってしまふ。聴き返す声がうわずっている。

「とぼけられるならばそれでも構いません。起こった事実は変わらないし、作物がよみがえるわけでもない」

「そ、そうさ！しかも、山から鷲が降りてきたとなれば、又シ殿の加護もなく、む…村はおしまいだ！」

とらの後ろで、家人たちが囁き合っている。皆が、とらの所作に注

目していた。

「龍神様はお怒りです…」

「何？」

以前の宗次を知る村人達は、少年の表情に見入ったに違いなかった。

見送ってから1日と数刻。

彼の澀刺とした瞳は、まるで別人だった。

大きな眼をしっかりと開き、とらの目をまっすぐ見る姿勢は、確固たる意志を持った者のそれ。

「あなたのした事は、龍神様に筒抜けだと言っ事です」

とらの表情筋が固まった。

離れた位置からでも、とらの喉を下る唾液の音が聞えてきそうだ。

「あたくしを脅そうというのか？」

「脅されていると思われるほどのことを、したのですか？」

宗次が、とどめの一言を発した。

しまった！

というように、とらは咄嗟に自分の口を覆った。

宗次が、不敵に笑う。

神がかったような、心の深淵を暴く嗤いだった。

おとなしく人の言われるままに行動することしか出来なかった少年が、今とらに意見し、彼女の罪を諫めに立ち戻ったのだ。そして、自信に満ちた笑みを作る。

それほどに少年が変わってしまったのは、まさに異界へと旅だったからか、龍神に近しくなったからか。

墓穴を掘ってしまったとらが、自棄になったように叫んだ。

「ええい！おとなしく朽ち果ててしまえば良かったものを！」

言っが早いのか、とらは着物の袂をひらめかせ、宗次に躍り掛かる。獲物を狙う獣のように、両の指を鉤型にして。

驚いたのは宗次ばかりではない。

頼里も、集まった村人や家人も我が目を疑う。

とらが、自らの行った罪を認めた瞬間だった。
身構える宗次に、とらはずかみかかる。

つかみかかったからといって、罪が明らかになった今、どうなるというものでもないのだが、そんなこと一々考えて行動できるだけの冷静さはない。

二人は、もみ合いになりながら地面を転がった。
はっと。

我に返った頼里が止めに入る。

「やめないか！」

その声を合図に、近場にいた男衆たちもとらを引き剥がしにかかった。

引き離されたとらは、充血した目で宗次を睨みつけている。

宗次も、噛み合った視線をそらそうとはしなかった。

真っ向から受け止める。

「おかしいとは…思っていた」

頼里が、さかった獣のように荒い呼吸を繰り返す妻に問いかけた。

「お前がやったことだったのか？」

「それがどうしたとういうの!？」

投げやりに答えたとらだが、まったく悪びれている様子はない。

とらが拘束されたのを見て、何人かの男たちがその場から逃げ出していた。

頼里は逃げ出す村の者をちらと確認し、ため息をつく。

「宗次…」

大井村の指導者は、自らが与えた成人の印で息子を呼んだ。

「…ヌシ殿はどのように思召しか？」

とらの行った行為は、神を冒瀆するもの。

本来ならば守護を失ってもおかしくはない。

頼里は、抵抗する妻の体を抱きしめた。

「あの方は…女神様は正しくは山のヌシではあられません。ですが、これからも沼の龍神としてこの村をお護りになるでしょう」

宗次自身、とらを如何こうしてほしいなどと願い出るつもりもない。

「もし、これから先…、あの方の解せぬ所で神の領域を冒すようなことがあれば、その時はこの村も終わりになってしまおうでしょう」「着物についた土を払う。」

村を出たときと同じ、白地の綿の衣…。

「お前は、この村に帰ってくるのか？」

ある種、望んでいるとも聞き取れる頼里の問いに、とらが目を剥いた。

「お前など、邪魔なだけだ!!」

「とら!!」

「……」

深呼吸して。

宗次はとらに告げた。

「俺は、帰らない」

大地に染み入るような澄んだ声が、頼里の願いに「否」と返した。しんと静まりかえる村人たちの前で、宗次は初めて臆することなく意志を述べる。

「俺は、女神様の傍で生きていきます」

その場にいたすべての人間が、安堵とも感嘆ともとれない微妙な吐息を漏らした。

啞然とするとら。

伏し拝む村人たちを残して、宗次は山へと帰っていく。

民に望まれるまま神の元へ行くのとは違い、自分の望むままに神の元へ帰る。

胸のつかえの取れた、晴れ晴れとした気分で。

ちゃんと、言える。俺は自分で居場所を見つけるんだ

しっかりとした足取りで女神の沼へと帰ってきた宗次の顔には、はにかんだような笑顔があった。

「おや？早かったね」

出迎えたのは、女神だった。

「宗次？」

サトミも顔を出す。

「俺、帰らないって言ってきました」

宗次の堂々とした報告に、二人は目を点にした。

「何！？お前、帰らないでどうするんだ！？」

「女神様の好みの顔でなくて申し訳ありませんが、改めてよろしく
お願いします」

「はあ！？」

「……宗次、考えを改めるなら今のうちですよ？この方の相手は又
シ様でも苦勞なさっているのですから」

「そうだ！……ってサトミ！お前は一言多いんだよ！」

「どうしても、だめですか？」

震える声で。

儂げに持ち上げられて華奢な左手。

そつと伏せられた瞼。

不安に形を変えた眉は、なんとも言えぬ美童ぶりを演出する。

どっきーん！

おずおずと、涙の膜に覆われた瞳が女神に向けられた。
着物の袷から覗く鎖骨が艶かしい。

どっきゅーん！

「お願い……しますうっ！」

「……！」

宗次の攻撃に崩されていく女神の理性を感じながら、サトミは主に対し無表情にも冷めた視線を投げる。

「しかし、宗次。あなたは生ける者。死せる私とも、神格を持つ女神様とも違う存在…。それを肝に銘じられますか？」

「俺は、ここで学びたい」

サトミの諭す言葉に、宗次は意見を重ねた。

「生きる術を。護るということを。そして意志を持つ意義を」

世渡り術は十分ではなか？とは思ったが、言ってやらない。

「よし！万事この私に任せるがいい！」

鼻息も荒々しく下心丸見えな態度で、女神は胸を張る。

「本当ですか！？ありがとうございます！」

がばつと叩頭する宗次のうれしそうな顔といたら、この上なくかわいらしい。

「…良いのですか？」

「あ？何か？」

確認するサトミの意図がわからず、女神は反問する。

「私たちは特に栄養を摂取する必要はありませんが…」

サトミが言わんとするところを悟って、一気に女神の顔から血の気が引いていく。

ここには、人間である宗次が生活していけるだけの用意がない。

「まずきちんとした厨と、食料調達の手はずをしなければなりませんね？もしかして、山を開放するおつもりですか？いえ、私は構いませんよ？あなた様が何もかも整えて下さるといふのなら？」

サトミの嫌味な言い方に、女神は気おされる。

「いや、それはえっと…ヌシに許可を取って…ぼちぼち…」

女神はずりずりと後ずさった。

「あの、サトミさん…。そんなのお世話になる俺が…」

「いいえ、宗次。こういうことは許可した張本人がなすべきことなのです！金物などは厳禁ですからね」

水の神は、金物を嫌う性質を持ち合わせている。

故に、煮炊きに金物の鍋類は使えない。

「それだけのもの、ご用意していただかなくては、宗次の生活は保障できませんよ?」

サトミのこめかみが痙攣している。

あまりにも胆略的な女神の嗜好に、いささか怒り心頭といったところか。

「宗次、夕餉までにはすべて整いますからね?」

「夕餉まで!? そんな短時間に用意できるか!?!」

「あなた様には、少しは責任というものをご理解いただかなくては「鬼!畜生!」

「はいはい。さっさとご用意なされませ?」

「宗次!助けてくれっ!」

「宗次に迷惑をかけない!又シ様に言いつけますぞ!?!」

あまりにも逆転的な体制の二人を目の当たりにしながら、宗次はどこが浮かれた気分ですらなくにはおれない。

宗次

そう、女神が初めて自分の名を呼んでくれたから。

女神と宗次とサトミの失踪

草木も眠る丑三つ時。

ぼつつと闇夜に浮かび上がるのは、瞬く星と白銀の月。

月があるのに見えるか見えないかという暗さなのは、三日月もいい具合で、雲に隠れているせいか。

「おのれ！サトミめ！どこへ消えおつた！？」

「どうしたのですか？女神様？」

「サトミの奴、私の収集品を持ってどこぞへ消えたのだ！」

眠っていないモノが…。

「収集品？そんなものありましたか？」

「隠しておいたからな！宗次が知らぬのもいたしかたあるまいが…」

「どこへ行かれたのか、わからないのですか？あなたでも」

人の入り込むことを許さず、頑なに道を閉ざしていた緑の深海は、ある日生ける少年を迎えた。

麓の村の少年。

龍神の被害から村を守るためと、差し出された生贄だった。

しかし。

その災害は、少年を村から追い出すために仕組まれたことであつた。

美童（男児限定）を好むとうわさの山の又シの伝承が、野心家の後妻には好都合。

先妻の子である少年ではなく、自分が胎を痛めて生んだ息子に家を継がせるために。

実際、美童を好んでいるのは山にある沼に住処にしている女性体

の龍神で、その女神の力もあつて一応事件は終着。

いろんな葛藤があつて。

そして少年は龍神の元にいた。

自分で、龍神の元にいると決めた。

「これが、どうしたことがまったく消息が感じられんのだ！」

「…何を持っていかれたのです？」

「少年の姿絵だ！」

「……………」

こよなく少年を愛する、女神の元に。

……………

女神が密かに集めていたと言う少年たちの姿絵は、程なくして見つかった。

麓の大井村から又シの山へと登る、正式な登山道の入り口付近に、投げ捨てられたように散らばっていた。

もちろん、きちんと置いていたものが風で飛ばされたとも考えられる。

散乱した和紙を見つけた宗次自身、サトミという女神の重臣が捨てて行ったとは考えられなかった。

サトミが貴族の生まれであるらしい事は、本人が語った昔話で承知している。いくら、女神の生活態度（主に妄想に耽るという悪い癖）に堪忍袋の緒が切れたのか…と思いを巡らしても、女神の大事な収集品を、それと知りながら打ち捨てるなどという子供じみたことはしないだろう。

というか。

サトミなら、一面と向かって女神の頬を張り倒すくらいのことをや

つてのける。
というか。

前に一度その場面に遭遇しているし。
こそこそ隠れたりするはずも無い。

「まさか、山の外に出た…？」

女神は山にいる者の気配くらい、難なく探し当てる事が出来る。
山の外に居る場合でも、沼の水を満たした甕を覗けば居場所くらい探索するのは朝飯前だ。

なぜ、サトミの行方を追えないのだろうか？

分からないまま、宗次は散らばった絵を拾った。

その一つに、サトミに良く似た少年のものがあつた。

黒髪を後頭部の高い位置で結び、卯の花重ねの色味の水干を身に
着けている。青い緑の染料が美しい。

しかし、女神がこんなものを集めていたというのは、サトミでな
くともため息をつきたくなる。

サトミは殊に女神が夢想する事を快く思っていない。

立派に神格のある龍神が、浮世の煩惱に塗れてどうするのかと、
毎刻のように諫言していた。

今思うと、自分が仕える主になんと無礼なことをしているのだら
う。

女神の方も、小言を言われる事になれてしまっている。

…むしろ、怒るサトミを見て

「釣りあがった眼も美しいよね…」

と悦に入る始末が多々ある。

たった4日ほどしか一緒に過ごしては居ないが、多々ある。

そんな風だから、二人の関係は続いている。

そう言っても過言ではない。

だが、少年たちの絵ばかり集めてないで、真面目に仕事をして欲
しい。

「あれ？」

以前女神は、好みの少年くらい自分で攫ってくる、などと危ない発言をしたことがなかったか？

「まさか、絵に綴じこめたり…なんて…」

「そのように器用なことができるものか。鬼でもあるまいに」

「うわっわわ、わ！」

耳元で囁かれた声に驚いて、宗次は手の中の絵を取りこぼしてしまいそうになる。

囁いたのは、霊験あらたかなる村の守り神。

なぜか登場は逆さ浮遊。

その実、背ひれなのだという灰色の髪が振り子のように揺れている。

「す、すみません…」

恐縮して謝る宗次に、にっと白い歯を見せて笑う女神は彼の手の中の姿絵を大事そうに受け取った。正位置に態勢を整えて。

「ありがとうございます、宗次」

「いえ。…あの、もしかしてその中の一枚はサトミさんですか？」

「あ？ああ、いや、これは私が《生きていた時》に描かせた理想の

おのこ
男さ

「え？」

今、なんて？

「もう、あの日サトミが私の元に現れた時は本当に胸が打ち緒震えたよ！」

宗次の疑念には気付かず、女神は大仰に天に拳を突き上げてとろんとした表情になる。

サトミが、作物の根付きの悪かったと言う開墾当初の大井村の為に捧げられた夜の事を思い出しているのだろうか。

「ずっと理想に思い描いていたままの少年が目の前に立っていたんだからね！死んでいるのは分かった。しかし、それでも美しかった！我々の持つ神々しさに似た透き通る霊質がの波動がなんとも言えぬ興奮を呼び起こし…」

「ごういう時は、遠慮無く叩いて差し上げなさい！って、サトミさんは言うんだよね…」

物思いに自分の世界に入りこんだ女神を、正気に戻すには刺激を与えるのが一番らしい。

「あの、女神様」

だからと言って、新参者の宗次は遠慮しないわけにはいかない。

「こんなんでも、一応神様。」

「サトミさんの行方は？」

「！そうだった！」

忘れっぽくても、一応崇敬に値する存在。

「俺が申し上げるのもなんですが、又シ様に相談してはいかがですか？」

「空気が凍りついた。」

又シという言葉に反応して、女神の顔が引きつる。

「そう言えば、村を守護しているのは女神だ。」

「村人は又シの山を崇めているというのに。」

「又シは…？」

「あの？」

「…ふふ、みなまで言わずともよい！私には美童の心など手に取るように解るのだからね」

「そう言う女神は、宗次の鼻の前に右手をかざし、左手は地面に平行に伸ばしている。」

「明らかに 逆さ浮遊の登場には劣るが おかしい。」

「平行に手を伸ばす行為に意味を見出せない。」

「動揺しているのが丸わかりだ。」

「子供のお前は知らぬかも知れぬが、この山の又シの性は蛇でね…」

「はあ、水の属性ですね…。雨の神様ですか？」

「そう。上古よりこの地に住む又シ様さ。私等神と呼ばれる存在とはすこし隔たった生物なんだが…」

「そうなのですか？」

民にとっては、又シと龍神なんて些細な違いでしかない。
崇拜する目的と見返りは同じだからだ。

「そうなのだよ。とにかく、又シ様は、はっきり言わせてもらえば不在だ！」

いや、そんな堂々と宣言されましても。

「不在？どういうことですか？」

村の民は、いもしない又シを崇めていたということになる。

その分女神が代役を引き受けていたとはいえ、一体なぜなのだろうか？

いつから？

宗次の質問に、女神はなかなか答えを返さない。

ぐぐ、と唸り声を出しながら相変わらず顔色が悪い。

何か、隠している。

宗次はそう直感した。

「女神様？」

女神は、手に握った美童達の姿絵に視線を落とす。

一番上には、サトミによく似た風貌の少年。

「……逃げられた……」

「はい？」

つぶやかれた言葉は細く。

「逃げられたんだよ！」

「誰に？」

「又シ様に！」

「誰から逃げたのです？」

「…私だよ！」

「はいい！？」

又シ様が女神様から逃げた！？

思わず、素っ頓狂な声が出ってしまった。

女神と宗次と女神の過去

「だって、かわいかったんだよ」

女神が言うには、この山の又シはとてつもない美貌の持ち主であるらしい。

「力も強いし」

当時齡数百年で、まだ若い部類に入る又シは人間の姿をとる時も童子形だったそうだ。

「全身に稲妻が走ったって感覚かな？」

「いや、死にますから。そんなことになったら」

「私があんまり嫁にしてくれってうるさいもんで…」

女神は、元は人間だったと話してくれた。

南都に居を構える有力氏の、末の娘だったそうだ。

「又シ様の方があなた様から逃げ出した、と」

「有体に言えば」

現大井村は、南都奈良から出雲に抜ける街道の通り道だったことがある。

今となつては海路も開かれ、またわざわざ山を越えなくてもよい新しい街道が整備されているが、たまに、出雲に参詣する人たちが村を横切っていくことがあった。

女神も、かつてはそんな参詣者の一人に過ぎなかった。

「私はね、幼いころから体中に鱗があつたのだよ…」

女神は、言いながら衣の上から腕をさする。

今は鱗が生えている風には見えない。

「これは恐らくスセリヒメの神力を備えた者だと、生まれたころから囁かれていてね…」

出雲にお送りして、その神力をお返しせねば。

「態よく厄介払いしようって、魂胆が丸見えでさ。なんせ、実際気色の悪いことこの上ない体だったからね。八百万の神の末座にでも加わってくれよ、それがせめてもの親への償いと思え。そう言われど家を出た」

女神の身の上話を聴きながら、宗次は「みな同じだ」と表情を厳しくした。

自分も、サトミも。

女神も。

みんな家族から置き去りにされた。

放り出された。

邪魔なものだと。

「ところがさ、この山を越えようとした時、不思議なことに山を抜けることが出来ず、あの沼：今住んでる場所な？…に辿り着いた」

陰鬱な影を生み出す淀んだ沼。

されども、決して嫌悪感を伴わない不思議な場所。

「気になって水面を覗き込んだら、私の目は水中から空を見上げていた」

沼は、外から伺えるより遙かに澄みきっていた。

呼吸も苦しくない。

ふと体を見ると、鱗がきれいに無くなっていた。

陸上で歩くのと同じ感覚で水の中を移動する。

自然に、龍神へと姿を変えた女神は「私は、ここで生きていく」と確信したのだという。

宗次の心に礫が投げ込まれた。

波紋が体中に広がっていく。

「私はさ、自分の生きていく場所はここなんだって、すぐに解って、素直にうれしかった」

宗次が女神の元で生きていくと宣言した時と同様、女神にも後悔の念はないようだ。

ほどなく親類が社を建て女神の御霊を奉った為、神格が宿ったらしい。

存外、神様になるのは簡単なのだろうか。

「しばらくは、龍の姿のまま山の中をうろつろつてた。そしたらさ
！」

急に、女神の調子が上がってきた気がして、宗次は嫌な予感がする。

「目の前に輝かんばかりに清げな男が佇んでいるじゃないの！」

ここで雷に打たれたのだよ、とにんまり微笑む女神。

宗次は「そうですか」と返すしかない。

「又シ様との出会いだよ」

『そは、我が眷属なりしか』

良く通る、凜とした声音で又シは言ったらしい。

きっと、後で後悔したに違いない。

もし、女神の変わった志向を知っていたら、決して近づけなかっただろう。

「で、それなら嫁にしてくださいと？」

「ああ。頼み込んで、我は妻帯などせぬと断られて、じゃあ傍に侍
ることをお許しく下さいといえ、寄るなと言われ…」

「あきらめなかつたのですか？」

「まあな。類まれなる美童をみすみす逃してたまるか」

そんな、偉そうに言われても。

いや、偉いんだろうけど。

「私はさ」

サトミの痕跡を探しながら、山の中を歩き回る。

そうやって神経をサトミ探しに傾けながらも、一方では昔語りを止めない。

女神が自分の過去を話すのは、心に穴が空いている証。

宗次にはそう思われた。

「又シ様の気持ちを考えなかった…。だから、サトミも…」

「サトミさんは女神様をお好きですよ？」

「わかってるよ。違う、私が言いたいのは、サトミも私の気持ちを考えていないということさ！」

女神は、歯がゆそうに下唇をかみ締めた。

「黙って、しかも姿絵まで持ち出して、一体どこへ行ったのか…！」
容れ物によって形を変える水のように、女神の豊かな髪が左右に奇跡を残す。

振り返った反動で、空気が道を作る。

「又シ様の力に頼れない。私の力の及ぶ範囲にもサトミの痕跡はない。まず何をするべきか？」

真剣な女神の眼差しに、宗次は影を踏まれた感覚に陥った。

この女神。

好みの美童の為なら、なんでもやってしまうに違いない。

そんな気迫のこもった眼光。

「…ど、どのように？」

その考えを聞きたいような、聞きたくないような。

宗次は、その細い手で体を庇うように抱きしめた。

緊張に…女神の闘志に体が緊張して震えている。

「サトミが消えた原因を検証！及び山外への搜索拡大！あわよくば又シ様も搜索の手にひっかかるやもしれぬ！」

とことん、類まれなる美童を逃すつもりはないようだ。

………

自分の体ではない。

自由にならない四肢の感覚を、サトミはそう結論付けた。

別の入れ物に、魂を移し替えられているような。

神経が連結されていない。

どこだ？

ここはどこだ？

見えるのは真っ暗な水中。

？

そもそも、視界は明瞭か？

水だと解るのは、たゆたう感覚を前にも体験した事があるからだ。

見えているわけではない。

ここで何をしている？

何故ここにいる？

直前まで、何をしていた？

…

思い出せ。

記憶を拾い上げる。

！！

サトミの思考は、鈍い刺激のために途切れた。

「余計な事は、思い出さずともよい」

誰かの囁きが、心地良い。

女神が住む沼の辺。

一見、人の入る隙間のないように見えて、実は内部はただっ広い

(本当に広いだけ) 祠の中で、女神と宗次は向かい合っていた。

「まずは、サトミさんが消えた状況を説明してください」

「あれは夜中の事だった…」

「ええ。真夜中に女神様の叫びで起こされましたから」

「姿絵を持ち去ったのだ！」

「はい。承知します」

「…行方が掴めぬのだ！」

「お伺いしました」

「……又シ様も行方知れずだ！」

「存じ上げております」

「……」

「サトミさんの失踪理由に見当は無いのですか？」

「……」

「無いのですね」

「……」

宗次はため息を一つ。

女神は空しいから笑い。

「では、何故サトミさんが女神様の…収集品を持ち出されたのかは？」

「わからぬ。ただ…」

「ただ？」

「…何時の間にか消えていた」

「え？もしかして、サトミさんが持ち出す現場をご覧になったわけではないのですか？」

宗次の声が、一段高くなった。

「…あ、ああ…。気付いたら、姿絵も、サトミも居なかった…」

軽く結った後頭部の髪に手を入れ、乱暴に掻きながら、女神は苦笑して見せる。

「サトミさんが咎人だと断言できないのではありませんか!？」

まだ罪も何も明確にされていないのに、咎人呼ばわりする宗次も宗次である。

「そう言うがなあ、ここに入る事が出来るのは私と！宗次と！サトミだけだろう!？」

「それもそうである。」

「又シ様ならともかく…」

又シ、という単語に、宗次は反応した。

「又シ様は、何でもお出来になる方なのですよね?」

頭脳の中で、途切れ途切れだった糸が一本に縊り合わされていく。
「ああ…。あの方の力はすさまじいぞ？だから、村で雨による災害
が起きたと聞いた時は、まさか戻ってこられたのかと…って、ああ
？」

表情を歪めた女神が、考え込む宗次を上から見下ろす。

「まさか…いや、もし又シ様だとしても、私が気付かぬわけが…」

「又シ様は、この山の又シなのですよ？大体、すごい力の持ち主だ
とおっしゃられたばかりではありませんか。女神様に気付かれずに
祠に潜入するなんて、容易い事では？」

宗次も負けずに女神を見上げた。

「では、何故サトミまでいなくなる？」

又シが全ての根源などと勘ぐられては、良い気がしない。

謎が消えぬ限り、食い下がらなくては。

「それは、又シ様直々にお話していただくほかありませんが…」

宗次が、口を尖らせて言った。

「そこまでおっしゃられるなら、女神様もしっかり考えてください

よう」

「ずきゅん。」

宗次の意図しない「攻撃」をくらい、女神はしばらく、まともな
思考を展開できなかつた。

女神と宗次と又シの雷

宗次は、自分の容姿は女神の好みではないと思いついていた。

そもそも、サトミのように若干切れ長の理知溢れる瞳を持っているわけでも、ほんのりと色づく柔らかな頬でもなく、艶やかな直毛の髪でもないわけだ…。

ほっそりとした中に丸みを秘めた、子供らしい体つきと言えばよい意味にとれないこともないが、単に非力なだけで…。

集められていた姿絵の美童たちには程遠い、くりつとした二重の目と、ふっくらとした唇、細い猫っ毛が特徴なだけの、普通の少年だ。

自分の興奮加減を押さえ込もうと、板間でもんどりうつっている女神を冷ややかな視線で眺めながら、宗次は考えを改める。

つまり、女神はどんな少年でも愛らしければ万事許容するという感が強い。

もし、俺が女神様の親だったら、こんな娘鱗があるうとなかろうといやかかもしれない…

半分女神の元にいると決意したことでさえ、後悔しようとしていない。

あ…？

宗次の思考回路に火花が飛んだ。

もしかして、サトミさん…まだサトミさんが取ったとは限らないけど、女神様の悪癖を直そうと…？

「宗次！」

「は、はい？」

いきなり女神に呼びかけられて、宗次の思考が途切れる。

「この山で、私の神力の及ばぬ場所があるのを思い出した！」

「…え？何処ですか？」

「又シ様の池だ！サトミはもしかして、そこにいるのかもかもしれない」
「山の中は隈なくお探しになったのではなかったのですか？」

「面倒だから、よく近づいていないのだ。そこが盲点だった！あそこ
にいられては、結界が強くて出向いても中の様子なんて判りはせ
ん！サトミが行くなどと、考えもしなかったしな…」

「どうしてです？」

「又シ様の池には、サトミを連れて行った事がない」

今まで一度も踏み入ったことのない場所へ、果たしてサトミが何
の目的で行くというのだろうか。

姿絵は、麓付近で発見されたというのに。

どうも腑に落ちない。

だが、探しに行くくらいの手間はとっても良さそうだ。

ゆらゆらゆらと。

魂が。

もはや、形を留める術を忘れてしまったかのような。

サトミは、考える事を止めた。

ここがどこなのか。

先ほどの声の主が誰なのか。

考えようとする度に、鈍器で殴られるような痛みに襲われる。

痛みを感じるなど、私が抗っている証でしょうか…

ズキン。

ズキン。

広がる痛みにも、かろうじて意識が繋ぎ止められていた。

………

その池は、又シの山の南の斜面の谷間にあつた。

又シの山は小さな山だが、その全てを見て回ろうとするならば1日では事足りなくらいの面積はある。見て回ったところでなんの利益も無いので、そんな事をする者は一人としていない。良い狩場は猟師が知っているし、美味しい山菜の採れる場所も採りに行く者だけが知っている。

そういつた場所は代々の村人が知り尽くしている。

誰も、他人の領分には立ち入らない。

同じく、女神も又シの領域には原則として立ち入らない。

又シは女神を避けているので、当たり前だが沼には近づかない…。

「ここに足を運ぶのも、数百年ぶりか」

女神の独り言を、宗次が拾い上げる。

「そんなに？」

「ああ。この前来たのは又シ様が山を出られた時だから…。5000年位経つておるのではないかな？」

5000年。

宗次はざっと考えを巡らせる。

都が長岡にあつたあたりか。

記憶があいまいで、本当に自分に学の無い事を思い知らされる。

女神は懐かしむように眼を細めて、波紋一つ立っていない池を見つめた。

宗次には見えないが、結界が張つてあるらしい。

結界とはこれまた仏教的なと思わずにはいられないが、よほど女神に近づいて欲しくなかったのか、元から自分の領域を侵されたくないからか、かなり強力なものらしい。

あの尊大な態度の女神が、冷や汗を流している。

神様でも、汗って流れるのか…

どうでも良い事を思いながら、宗次も池を見つめる。

見つめていても、特にこれといった畏怖も感じる事は無い。

やはり、又シはここに戻ってきているわけではないのか。

いや。

「宗次！下がれ！」

「うわぁっ」

そう命令しながら、女神は宗次の着物の襟をむんずと掴んで後方へと投げていた。

命令するまでも無い。

良ければ「投げるぞ」か「引つ張るぞ」くらいの注意をして欲しいくらいだ。

投げられた宗次がすぐさま顔を上げると、先ほどまで二人が立っていた位置の土が、ぶすぶすと煙を吐きながら黒く変色していた。

「女神様！？」

「ここだ！」

女神は、宗次の場所よりも池に近い位置に居た。

なぜか逆さ浮遊状態。

状況や声は緊迫しているのに、宗次の心はまったく緊張できない。おかげで冷静になれた、と感謝するべきか。

「これは、落雷？」

音も衝撃も感じられなかったが、間違い無い。

「又シ様の…！」

女神が頭を天に向け、そう叫んで宗次に情報を与えた。

やはり、又シは女神に気取られないよう山に戻ってきていたのだ。「いらっしやるのですか！？又シ様！？」

女神は、池の方向に向かって叫んでいた。

動かずに居る所から見て、女神のすぐ内側からが又シの領域なのだろう。

ようやく、宗次の心臓が早めの鼓動を打ち始める。

具現した力。

雷は水の神族の証。

「サトミ！！そこにおるのか！？」

女神の顔が、切なげに変化した。

愛しい者を、求める表情…。

途端。

「そちの節操の無さにはほとんど呆れて物が言えぬわ！」

どん。

「ぐるぐる、ぴっしやーん！」

「ひいひい!?!」

怒声と共に、女神の足元に落雷。

女神は情けない悲鳴を上げた。

「姿絵は隠し持つは、稚児の霊を側に留めるは、それだけでは飽き足らず、守護地の童まで留め置いておるとは！恥を知れ！」

どん！

幼い童子の声と同時に、雷が落ちてくる。

「そちのその腐った根性、ワシが叩き直してくれる！居直れ！」

半ば置いてけぼりの状態に、心なしか感謝しつつ、宗次は

「又シ…様？」

試しに呼びかけてみる。

初めて女神と出会った時同様に、想像していた又シの印象とは違う。

宗次の呼びかけに答えたのか、激しい落雷は止んだ。

宗次い、助かったあゝ

と女神が情けない声で感謝の意を述べている。

「……いかにも。そち名はなんぞ？」

柔らかな声音が、一帯に満ちる。

火花が散って、光が集まった。

視界が白くなるほどの光が晴れると、宗次の目の前に腰に布を巻きつけただけの簡素な出で立ちの少年が…。

「又シ、様ですか？」

「いかにも、と言っておる」

逆さまになって浮いていた。

女神と宗次と又シの事情

逆さまに浮いた状態で登場するのは、この山の神たちの習性なのか。

神々が全てそうだったら…と思うと、ありがたみが三割減な気がする。

女神と宗次の前に姿を現した又シは十かそこの童子の姿をしていた。

身に纏うは真っ白な腰布のみ。

きつと切れ長で理的にのびた目じりと、産毛のように薄い眉。

頂点近くできつく一本に結わえられた青銀の髪は、本性が蛇である為か。

ふつくらとしてほんのり桃色の頬は、幼さを残して柔らかさそうだなんにせよ、女神の好みの容姿である事に疑いは無い。

「俺は、大井宗次と申します」

「そちもこやつにたぶらかされた口か？」

「…俺も？」

又シの物言いは、宗次以前にも前例があつたと物語るものだなかなか鋭い。

「先ほど、稚児の霊と申されましたが、もしや、我々の探している者のことではありますまいか？」

「んん？」

又シが、宗次の問いに関心を示し片目をひそめた。

「我々、か。夜叉の仲間気取りか？」

夜叉？

「確かに。久方ぶりに我が山に帰ってみれば、見知らぬ稚児の霊がうろろしておった。夜叉の気質は身に染みてわかっておったからの…、これはと思うた」

年輪を感じさせる話方。

「案の定、夜叉の祠には姿絵が隠してあるわ…こうして、そちのよ
うな男おとこまで傍らに侍らせておる…。これは、神格を得た者としては
由々しき事であるとは思わぬか？のう？」

夜叉という固有名詞が、女神のものであると理解できた時、宗次
は又シの口調に見え隠れする”優しさ”に気付いた。

名前を呼ぶほどの、親密さが感じ取れる。

それは、女神の執拗な恋情を厭き山から逃げたという過去と、矛
盾しているように思えた。

「のう？ではありませぬ！サトミをかどわかされたのですね！？」

女神が、又シを言及する。

「うるさい。元はそちが蒔いた種ぞ」

この二人には何かある。

そう直感させる雰囲気があった。

「サトミは！行き場を失った哀れな魂なのです！返していただきた
い！」

食い下がる女神を軽蔑の…宗次には蔑んでいるというより、心底
女神の事を心配しているように見える眼差しで見上げて、又シはさ
すがとも言うべき威風堂々とした態度で言い放つ。

「そちの傍らが、あの稚児の居場所だとうぬぼれるか？」

女神の表情が凍りついた。

「傍らに留め置き、行き場を失わせたのは、夜叉、そちぞ？」

心臓を、驚づかみにされた感覚が、女神をそうさせた。

その言葉に心臓を驚づかみにされたのは、宗次も同じだった。

自分の居場所は、…？

「うぬぼれて居るわけではありませんせぬ！サトミが！あの子が自ら決
めたこと！ここにいる宗次とて相違ありませんせぬぞ！？」

「…通過点に過ぎぬ事が、解らぬのか？」

又シの言葉は、どこまでも冷たくて、重かった。

「彼の魂は、半ばそちの神力に影響されておる。もはや黄泉路へ参
ること叶わぬであろう。あれは、そちと同じ道を歩く事になる」

「……まさか……」

「そちは我と同じ雨神が眷属、故にあれも眷属となるつぞ」

二体の靈威ある者が、サトミの未来を予見していた。神格を有する者へと昇華する、その命運を。

「又シ様……。サトミはどこに居るのです？」

顔に暗く影を落として、女神が尋ねる。

「……そこまで、あれを欲するのか？詮無きことぞ？」

「サトミは、貴方が居られぬ間私を助けてくれた大事な子なのです……」

「格が上がるのが、嫌か？」

「いいえ。ですが……」

「そうであるう？そちがこつも意地になるのは、自分の愉しみを奪われたからに過ぎぬ。目を覚ませ。そちはこの地の龍神ぞ？」

膝を折る女神の肩に、小さな又シの手が添えられた。

その行為からも、又シは決して女神を嫌悪しているは無い事が見て取れる。

だから。

「又シ様は、何故この山から出て行かれたのです？」

宗次は、その疑問を口にせずにはいられなくなつた。

「宗次？」

女神が顔を上げた。

その理由は話して聞かせたはずだと、無言のうちに主張している。

「存外、眼力の鋭い童だのう……。気になるか？」

「……はい」

宗次の、真摯な態度は女神にも伝わってくる。

又シにとつてもそれは同じ事なのだろう。

女神に対しているときとは比べ物にならないほど穏やかさで、宗次に対峙する。

「夜叉も聴くがよかるう？どうせ、自分の所為で我が出奔したと思つておるのだろう？」

女神の事は全て見透かしているという物言いだった。
ぼかんと、女神が口を半開きにしている。

「違う…のですか？」

「単にそちから逃れたかったわけではない」

又シは、宗次に聞かせると同時に女神にも聴かせた。

「出雲への道中であつたそちをここへ呼び寄せたのもワシじゃから
の」

又シは一層柔らかな表情で、告げた。

「他で子をもつける為じゃ」

はい？

張り詰めた空気に、ぼわわんと花が飛んだ… ような。

「ななな、何故私ではなく他の女子に?! 私ではだめなのですか!
!?!」

「女神様、問題はそこでは無いと思つのですが…」

宗次が脱力しながらツツコミを入れる。

なんだ？

なんでこう大井の霊格はこうもアホ丸出しなのだ？

「そちはどこまでも間抜けじゃな!? 夜叉! そちは我が眷属だと申
したろうに!」

俺もそう思います、又シ様。

「子というは、その眷属のことじゃ! 誰かと夫婦になりまぐわつて
生まれるものではないわ!」

又シにも恥じらいがあるのか、体を真っ赤に染め上げて声を張り
上げた。

「我には、雨神の眷属を増やす役目があるのだ。夜叉、そちとて同
じ事ぞ! そのような者に言い寄られても困るわ」

まあ、そうでしょうね。

大体、こんな子供の姿でどうこうできるわけ無いだろうに。

「土地の有能なる守護者たるものへ力の片鱗を与え、霊格を上げる。その者がその地の神になるべく教えを施すのだ…」

「では、サトミは…!」

「あれは例外だが、そちの力に影響されておる。あれも神になる。そして、そちの元を離れねばならぬ」

又シから感じられた感情は、ある意味親としての思いに似ていたのか。

宗次は納得した。

「いいかげん、童子に心浮つかせる事を止めよ…。そちにそのような顔をさせたいわけではない…」

又シの言葉に、宗次はハツとした。

今にも泣き出しそうな、女神の顔が目に入った。

「私から姿絵を奪ったのも、サトミをかどわかしたのも、私のためと申されるか…?」

声が、震えているのが解る。

「少なくとも、あの稚児の格を調整するのはあれのためだ。不安定な霊体のままではいずれ消えてしまう。そのような哀れな末路をたどらせたいか?」

「そうなるとは限りませぬ!」

「なる。ワシはそちより長^くつ^くこちらの世に住ま^つ者ぞ、解らぬと思^うてか?」

女神が又シに勝る事は無い。

それが、彼女達の世界の法則。

サトミが、彼女達の世界へ入る事も…。

女神は地に座りこんで、サトミが居るであろう池へと首を傾けた。よほどサトミを大事に想っているのか、呆けて視点が定ま^っていないように覗える。

「全て、女神様のための行いだつたと、おっしゃるのですね…」

つぶやきながら、宗次は又シの考えを理解しようと勤めた。

だが、今の女神の状態を見るに、それは本当に彼女の為にな^って

いるのか不安に思う。漠然とした、不安。

「ああ…。その方は、夜叉がいつまでも童子を追い掛け回していい良いと思うか？」

「……」

そう言われると、はつきり言って困るかもしれない。

ということは、自分も女神の側を離れなくてはならないのか。

ああ。俺はまた居場所を失う事を恐れている…

不安は、自分のもの。

でも。

でも。

ちらと女神の様子を見る。

「!?!?」

思わず、宗次の肩がぎよっとすくめられた。

宗次の反応に、又シも宗次の視線を追った。

「夜叉!?!?」

又シもびくつと体を振るわせた。

それほどに、女神は異様…。というかなんとというか。

「ふふふふふふ…」

無気味な笑いを振り撒きながら、小躍りしている。

命名、「歓喜の舞い」

顔が、とろけんばかりに緩んでいたからだ。

「私は何を深く考えていたのだ…」

ついに頭がおかしくなったのか、女神がゆらりと立ちあがった。

「サトミが神格を得る？そうか、私の元を離れるか…。ふふふ」

「……女神様？」

「…夜叉？」

「又シ様…！貴方に私の好みをとやかく言われたくはありませんからね…？いいですか？」

凄みが増している…。

怖い。

目が据わっている。

何を考えているのか読み取れない、怖さ。

「サトミの住む場所は、私に決めさせてもらいますよ!?!?」

「何:~?」

「神になるという事は!同格という事!会えなくなるわけでは無いのでしよう?出向いてやる!」

「守護地を離れる事はならぬぞ!?!」

「又シ様に言われたくはないですね!」

「我の役目の事は話したるうに!」

「ずるいです!私にもその役目とやらをやらせてください!」

「そちはなぜそこまであの霊に固執するのだ!」

「あれえ?嫉妬ですか!?!又シ様!」

「愚か者!」

母と子が喧嘩しているようにしか見えない。

「嫌だなあ、私の一番は又シ様ですからね?」

「そちはその性格を直さぬか!」

「こついう神が居てもいいじゃないですか!」

「雨神の格に関わるではないか!」

「格、格!格!格ばかり気にしてもしょうがありません!」

いや、十分大切だと思う。

二人の言い争いにあっけに取られ、宗次は呆然と立ち尽くす。

そう言えば、女神が自分の妄想世界へ飛んでいったら、どうするんだった...?

サトミさんが...。

ばしーん!

少し冷たい風が吹いて、

「叩いて差し上げなさいと、申したでしよう?」

少年の声が耳に届いた。

美童好みの女神の逸話、その語り

……

「それで？どうなったの？」

男の周りには、嬉々とした顔の子供たちが肩を寄せていた。我先に、誰よりも多くを、という気持ちの現れ。

「そのサトミという童の霊は、女神様のもとを離れ、無事立派な神様になられたのだよ」

へえへ

と、子供たちが歓声をあげた。

小さな郷は、今税として回収される米を収穫する農繁期。

大人たちは稲を刈りに田へ赴き、手伝いが出るほど大きくない子供たちは一所で面倒を見られる。

今日は、山の麓の大楠の下…。

昔話をする男の背には、立てられたばかりの若宮が一つ。

「先生！女神様と又シ様はどうなったの？」

先生、と呼ばれ、男は照れたように笑んだ。

目じりに、笑いじわができて、優しげな印象を残す。

「まだまだ女神様はいろいろな所業を成しておられるよ」

男は、小さな子供の頭をなでた。

日も落ちてきて、子供たちが家へ帰る時間が近づいている。

「先生！人間の男の子はどうなったの？」

肩口で綺麗に切りそろえられた髪を持つ少女が、男に聞いた。

「そうだね、人が神様や山の又シ様と一緒に暮らすことは、本当はできないことだからね。しばらくして、色々な知恵をつけてお山を

出て行くことになったんだよ」

「また居場所、なくなっちゃったの？」

「難しい話だけどね、居場所というのは自らが作り上げるもので、なくなったりするようなものではないんだ」

「ふーん？よくわかんない」

「さ、もう夕餉の時刻も近い。暗くなると、おうちに帰れなくなるよ」

「えー、まだ一杯お話し聞かせてよー」

男は立ち上がり、青い袴の土を払った。

「…うん、たくさんお話ししたいことがあるから明日も待っているよ」

山に住む、眷属を増やす役目を負った蛇神と、神になった霊の話。

そして、神になった少年の話。

そして。

美童好みの女神の逸話を。

宗次と女神とサトミの留守

夏の日差しも、そろそろ苛烈さを潜めつつ。

ここ十数年の間、都では、大きく二派に分裂した天皇家が家督を争い、鎌倉はその介入に余念がない。

いくつかの大きな有事を乗り越え、磐石たりえた鎌倉の政治もずさんでいるという。

「はあああああ」

そんな世相を反映した…わけではない大仰なため息が耳に付く。

「あああああ」

ため息が嘆きが変わる。

境内を掃き清めていた宗次の手が止まる。

「…サトミさんなら、出雲ですよ」

「昨日聞きました…。早くないですか」

見るからに消沈しているのは、大井村の龍神、夜叉である。

「新参だから、早く行ってお出迎えをするらしいですよ」

「まだ9の月ですよ」

言つて、女神はさらに撃沈する。

「ということは、ふた月も会えないじゃないか！」

神々は、一年に一度出雲に集まる慣わしがある。

そこで何をしているかは詳しく聞いたことは無いが、ひと月帰らない。サトミはまだ新参であるため、さらにひと月先に出雲に入る。

また、すべての神が集まると守護にも弊害がであるため、必ず留守番の神がいるそうだ。

女神も留守番組だ。

「陰謀だあああああ！」

宗次は苦笑するしかない。

宗次は、すでに立派な青年になっていた。

サトミが神格を得るという一件以来、思うところがあり女神の元を離れる決心が付いた。

否。

迷いが無くなったというべきか。

神職への道を歩み始めたのだ。

家を継ぐ責の無い男児には、珍しくない進路だ。

宗次の村でも、その意味は様々だが、寺社仏閣へ奉公に出た子供は少なくない。

サトミを祭る神社も必要だし、神社があれば神職が必要である。

そも、小さな宮だけに専属の宮司がいる必要もなかったため、ほどなくして正階を得た宗次がサトミの神社の手入れをしている。

宗次の思いを知ってか、一連の大井村での事件もあり、父頼里は各方面へ根回しをしてくれていた。

サトミの神社は、大井村よりひとつ山を隔てた東の村に建てたれている。

「もう俺では女神様の意趣にそぐわなですからね……」

女神を見下ろすほどに成長した宗次は、もちろん声変わりも終わり、まったくもって女神の好意的ではない。

神格を得たサトミとはいえ、女神の元にいたときと変わらず、理知的な一重が美しい童のままだ。

わざわざ足を運んだにもかかわらず、いるはずの美童もおらず、宗次も成長して見事な大人、となればその落胆も激しい。

しかし、女神は二日にわたって当地を離れる気配が無い。

「なあ、宗次」

落ちた声音のまま、女神が名を呼ぶ。

「はい、なんでしょう」

「お前最近、村の子供に昔話をしてやってるそうじゃないか」

気に障ったのかな？

話の流れにはまったく関係の無い唐突な問い。

一瞬、自身の勝手な振る舞いを申し訳なく思い、宗次は謝罪を口

にしようとして女神へ向き直り…、止める。

女神の顔に才気が蘇っている。

「いかん、よからぬことを考えておいでだ。」

「かわいい子、いる？」

言外に「私好みの男の子を連れて来い」と命じられているのが判った。

宗次と女神と童の本音

逆らったら、どうなるのかな。

逆らう、なんて大それたこと、できてもやらないのが宗次の甘いところだ。

「女神様…又シ様にまた怒られますよ？」

ささやかな反抗も、女神に効かないことは分かっている。

「いない方は怒りようもない」

「…女神様、みんなの前にでてきちゃだめですよ？」

「わかってるって」

やはり女神の要望を聞き入れるはめになる。

「皆が集まるのは、昼過ぎですよ？おとなしくお待ちください」

「えー！まだまだじゃないか！」

「とうかですね、本当に何しにいらしたんですか。サトミさんいないんだから、帰ればいいではないですか」

「直球だなー」

うーんと唸りながら、女神は灰色に近い銀の髪を掻く。

「実は美童がいないと生きていけない性質でね」

実は、と告白されるべくもない、周知の事実ではないか。

「そういう意味でなくさー、なんというの？本当に贅が必要だったってことが今更わかったというか」

「え？」

「今までサトミが側にいたし、ひと時とはいえ宗次もいたし、気にしていなかったんだけど。いなくなるとこう力がでないというか」

「つまるところ…」

「かわいい男の子、求む」

つまるもなにも、結局何も変わらない。

午後になり、村の子供たちが神社に集まってきた。いつからだろう。

子供たちが自分のもとへ集まりだしたのは。

「先生、今日もお話聞かせて〜」

いつもなら、何の気概もなく子供たちと接しているのだが…。

女神様のお気に召す子って、いたかな。

そんなことを考えてしまう。

なんか、人攫いの悪人みたい。

「先生？どうかしたの？」

女の子が見上げてくる。

「ごめんね、なんでもないよ」

宗次は、子供たちをいつもの大楠の根元へ誘う。

どこかで、女神が見ているはずだ。

今日は、女神様がいるからご本人の話は控えよう。

そうして、宗次の昔語りとも物語ともとれる話が始まった。

話をしている最中も、子供たちの中に女神好みの子がいなか、

吟味に余念がない。

宗次が吟味する必要もないのだが。

「さ、今日の話はこれでお終い」

「はい」

聞き分けのよい子供たちが、元気に返事をする。

なんて純粹。

宗次の心が少し痛む。

おいおい、少しですか。

自分で自分の感想に指摘をいれてしまう。

「ねえ、先生」

と、一人の男児が宗次の着物の裾を引いた。

「どうしたの？幸次郎」

幸次郎と呼ばれた子供は、裾を引いておきながら口ごもる。
「ん？」

今年5つになる幸次郎の目の高さにあわせ、宗次は膝を折った。

「どうした？」

やわらかな宗次の問いかけに、幸次郎はやつと二の句を継ぐ。

「兄ちゃんが、病気になっちゃったんだ」

「林太郎が？」

そういえば、幸次郎の兄林太郎の姿が今日は見えなかった。

病気とは聞き捨てならない。

「どうした？薬師には？」

「むずかしいことはわかんないけど、父ちゃんがお薬の先生よりお寺のキトウが必要だって」

祈祷？

「林太郎の様子は悪いのかい？」

「わかんないんだ。うつるからお前は近付いちゃいけないって、言われた」

うつむき、今にも泣き出しそうな幸次郎の頭に手を乗せ、宗次は考える。

近くにある、祈祷を行えるような宗派の寺院勢力。

南都か、黄檗か。

新興の派閥か。

「そんな大事に、よく来てくれたね」

この子が自分に話を打ち明けるのには、何か意味があるのだと。

「でも、兄ちゃん、その前の日は元気だったんだよ」
怖いんだ。

幸次郎は、本音を口にした。

漠然とした不安でも、それは恐怖だと言葉になる。

「キトウのお坊さんも、父ちゃんも、母ちゃんも、みんな怖い」

「大丈夫だよ。先生も、明日幸次郎のおうちに行っていいいかな？」

この幼子の、不安の理由を確かめなくてはと。

「先ほどの話、どう思われますか？」

子供たちを見送り、大楠の幹の上へ話しかける。

「お前の昔話か？」

不敵な笑みをたたえた女神が、例によって例のごとく逆さまにぶら下がっている。

「それとも、祈禱を要する病の話か？」

女神は、大人二人分ほどの高さからひらりと音もなく舞い降り、

宗次の傍らに立つ。

夕焼けに乗って届く暖かな風が、大楠の枝葉を揺らす。

ざわめき。

「神仏の力にすぎらうとする思想は珍しくあるまい。宗次、お主の村もそうであったように」

「それはそうですが」

「何か気になるのか？」

「祈禱が施しでなされているのなら、俺もどつどつ言つ気はありません」

金銭や、見返りのない、純粹な施しなど、近年稀にみる善行だ。

宗次が子供相手に昔語りするのはわけが違つ。

「幸次郎の家に、そんな余裕があるようには見えない」

「子のためだ。必死にもなるう？」

「薬師に頼るほうが、現実的ではないでしょうか」

「それは、その親の価値観ではないかね」

「しかし……」

「気になるというなら、己が目で確かめるがよからう」

女神の、宗次より少し低い視線がまっすぐに子供たちの家路を見守っている。

その中には、もちろん幸次郎の後ろ姿もある。

「あの童の兄か…よい年頃だろうねえ」

そのつぶやきに混ざる邪な考えには、気付かなかったことにした。

宗次と女神と住持の念仏

ここ二日、すでに三日目に突入しているが。

女神の様子がどうもおかしい。

サトミに会いにきた、とは言っていたが、こつも長く大井の山を離れたことはないのではないだろうか。

これまでも月に一度か二度、ふらりと現れてはいたのだが、日没までには村に帰っていた。

サトミがいないから、とも納得できるが、ふた月帰らないという事実は明白である。

童が必要だと、昨日言っではいたが…。

「…一緒に行けないんだよねー」

さも残念そうに呟きながら、女神は社の床をごろごろと寝転がっている。

以前も、神の領域から外へは出られぬのだと説明していた。

「林太郎、会いたいなー」

「あの、女神様、俺が行ってきますから。大人しくしておいてください」

「幼子の麗しい姿が拝みたい…」

「本当にそればかりおっしゃっていますね」

その言葉を女神が口にするたび、半ば冗談だと思っていたが。

「美童はあたしの生きる源だもの…」

だんだん、女神の鋭気が少なくなっているような気がするの、勘違いではあるまい。

宗次は、社の消灯を済ませ女神に向き直る。

「でも、別に林太郎は女神様の好みかどうかなんてわかりませんよ？少なくとも、サトミさんみたいな容姿ではないですし」

「お前も違っただろう」

「…はあ」

「なんだろうねえ、この倦怠感…」
重症である。

「では、行ってきますね」

「おう、気をつけてな」

後ろ髪を引かれる思いである。

しかし、いたしかたない。

幸次郎とも約束している。

「女神様も、お気を確かに」

「んー」

神様つて、死んだりしないよな？

不謹慎にもそんなことを思うほどに、重症である。

幸次郎の家は、村の中心部、市がたつ通りの裏路地にあった。

父親は左官をしていると聞いている。

それなりに見識のある職である。市の裏に住むのも、需要がそこにあるからだ。

佇まいには、むしろがかかっている。

手をかけようとしたところへ、声をかけられた。

「もし」

振り向くとそこには、若々しい、肉付きもよい上体をあらわにした男が立っていた。

幸次郎と林太郎の父である。

「若宮の先生か」

問われて、是と首肯する。

「幸次郎から聞いたのか」

眼光鋭く、威圧してくる。

「お前様にできることは何もねえ。帰ってくださらぬか」

「しかし…」

「今、都のお偉い住持様が念仏唱えてくださっているんだ」

確かに。

居住の前まで来ることなく、護摩のにおいと低い念仏が聞こえていた。

「そのようになさるほど、悪いのですか？」

さし障りなく、感情を逆なでしないよう言葉をかける。

「蛇神がとりついていてのだと、言われました」

一瞬、「じゃしん」という言葉面を「邪神」と捉え、女神の顔が浮かぶ。

そんな邪推を内心苦笑しながら振り払い、

「蛇、ですか？」

正しい字面を思いあて、問う。

このあたりの蛇神といえ、又シ様か、その系統を組むサトミである。

「しかし、何かあたりをもらうようなことがあったので？」

「…わかりませぬ」

祟り神の類でなければ、もはやあやかしの類ではないか。

「ひと目でも、叶いませぬか？幸次郎は、会えないと申しております。恐れながら、この佇まいでは…」

少し、食い下がってみなければ。

平均的な庶民の家である。間取りも多くはない。

外からみても、土間をのぞいても二間がいいところである。

人につつまる病であれば、家族どころかこの界隈の人々も危険である。

「先生！」

父親の、悲壮ともとれる土気色の顔が、みるみる怒りに満ちる。

「帰ってくれ！！林太郎は！お住持様に見てもらっているから大丈夫だ！」

その迫力に、気押されてしまう。

そして。

何かを隠しているのだと、宗次には感じられた。

「では、せめて、幸次郎に会わせてくださいませんか？」

「…幸は、少し行った親類の家に預けている。おつかあもそこだ」
家族ぐるみで遠ざけているのか。

「わかりました。ありがとうございます」

宗次は軽く叩頭し、父親と幸次郎の家から離れる。

去り際、少しだけ読経が止んだ。

その代わりに。

去れ、愚かなる龍神のしもべよ

頭の中に、低く、どす黒く。

人ならざるものの、声。

女神様、やばいことになっているかもしれない…。

宗次は、聞こえなかったように振る舞い、振りかえることなくその場を去った。

幸次郎が仮住まいしている親類の家には、幸次郎とその母親、そして父親の兄という男が住んでいた。

「先生！」

父親と同じように宗次を呼ぶその声は、しかし、凜として切迫した緊張感はない。

「兄ちゃん、どうだった？」

母親の膝の上で、幸次郎は期待を込めた目で宗次を見る。

母親も、幸次郎の叔父も事情を知っているためか、暗澹たる表情だ。

「ごめんな。家の前まで行ったんだけど会えなかったんだ」
なるべく優しく、そう告げる。

みるみる内に、幸次郎の顔色が沈む。

「ごめんね」

宗次は、もう一度謝罪を重ねた。

「失礼ですが、林太郎が病に伏せる前に、何か兆候はありませんでしたか？」

母親に、聞けることは最大限聞いておかなければ。

「…それが…特に思い至らないのです。いつものように、若宮様で遊んで帰ってきたくらいで」

その証言ではまるで、サトミか宗次が要因のような態である。

その推理がわかったのか、母親は続ける。

「あの、別に帰ってから普通で…お話も面白かったって。申し訳ございません…」

「いえ、すみません」

宗次も、なぜか謝ってしまう。

「父ちゃんが…」

「ん？」

幸次郎が、何かを思い出したように二人の間に入った。

「父ちゃん、ちょっと前に都のお寺を直しにいったんだよ」

「そうか。幸次郎の父上は腕のいい左官なもの」

「とても徳の高いお寺だって、自慢してた」

幸次郎が何を言いたいのか、ふと気づいて言葉の案内をする。

「…このたび祈祷に訪れている寺の住持というのは…」

「ええ、そのお寺さんのご住持様というお話です」

「祈祷料は…」

「実は、寺を直していただいた礼に、いらぬと」

本当に、善行を行っているだけなのか？

その可能性が脳裏によぎる。

だが、しかし。

念仏の切れ間に聞こえたあの声は、功德の高い坊主の靈験ではない。

あんな冷たい言葉は。

「若宮の先生！しかしわたくしからみても、おっとうの成すことは

恐ろしげに感じます！この母ですら、林太の様子もわかりませぬ！」

ああ、やはり何かがおかしい。

「わかりました。今日のところはお暇いたします。ですが、気落ちしないでください。私も力添えいたします」
宗次の申し出に対し、母親は深々と頭を下げた。

宗次と女神と宗次の上洛

「ただいま戻りました」

社の戸を開けると、女神は宗次が出かけたときのまま、床に横になつていた。

「おかえり」

やはり、声音に力は無い。

「お加減は？」

「よくも無く、悪くも無く……。これというのも、今日はおぬしが居らぬせいで美童が寄り付からじゃ……。」

「…それは、申し訳ありません」

苦笑して謝りはしたものの、「それ、俺のせいですか？」と加える。

「おぬし、最近サトミに似て反抗的ではないか？」

女神も、苦笑しながら体を起こす。

「で？林太郎とやらは？」

「それが…」

宗次は、林太郎を見舞った先での一部始終を話した。

「ほう？それは真にどこぞの坊主か？」

女神の問いに、はつきりと答えを返せない。

「寺の名や宗派は聞かなかったのか？」

「…洛中に…造ったと。宗派に関しても、家族はわからないといつていました」

「洛中？お前、あんな場所に寺など普請するものか」

「え？そうなんですか？」

「桓武帝が南都より逃れて築いた皇都の市中ではないか。門跡でも洛外、あの天台も叡山にあるのだぞ。そうやすやすと寺は建たぬよ」

女神が述べる理屈がいまいち理解できなかったが、相変わらずの自分の学の無さを露呈するのも癪なので、黙って受け入れる。

とりあえず、都の中心に得たいの知れぬ寺院を建てることはない、

ということか。

「物の怪にでも憑かれたか？」

「その線ですか？やはり」

「坊主は本物だとして、だ。祈祷がいるような怪異が林太郎の身に降りかかっておるのは間違いなكارう。寺を建てるとなると、それなりに実力を示す必要があるしな。しかし都合が良すぎる、か」
懸念は次々に浮かび上がる。

「お父上は、蛇の祟りがあると信じておられました」

「蛇ねえ…。サトミの村で蛇の祟り…。都合よく現れた坊主…」

女神はしばし考えをめぐらせ、あらたまつて宗次へ向き直つた。

「宗次、その京の寺とやら、探して来い。林太郎は私がなんとかしよう」

京へ上る街道は、いくつかの峠越えとなる。

宗次の足ならば1日はかからぬと目算するが、いかんせん初めて行く土地なので感覚がつかめない。

簡単な身支度を整え、軒に立つ。

不安がよぎる。

「…」
林太郎はなんとかする、と言っていたが、どうするのだろうか。

この村には女神の沼の水もなければ、神域も少ない。

「宗次、これを持って行け」

「はい？」

渡された布の中には、女神の髪がひと房包まれていた。

「それと、途中沼に寄って行くが良い」

「はあ」

「何、案ずるな！私を誰だと思つておる！」

「…」

宗次は、「あなただから心配なんですよ」とは言えなかった。

宗次は、一刻の内に大井村に入り、女神の本拠に立ち入った。

久方ぶりに訪れる沼は、相変わらさずだ。

沼に寄れ、とは言われたが寄って何をしろとまでは言われなかった。

腰を下ろし、一休みする。

女神が不在の為か、心なしか水がよどみ神々しさが欠けている気がする。

「女神様は…何を考えておいでか…」

誰にともなく発せられる言葉。

ちやぶんと

沼の水面が揺れる。

瞬間、水面下より大きな水柱が上がった。

「うわっ」

沼の水を全て持ち上げたのでは、と思われるほどの大きなしぶきが舞い、水柱が霧散する。

と、そこに女神が現れた。

「ええええ！？」

「うるさいのう、宗次は」

「林太郎は！？」

「だから、うるさい。今の姿は仮初じゃ。沼の水を私の形代にしているに過ぎぬ」

「…へえ」

仰天してか、敬意が払えなくなっている。

「宗次、飛び込め」

「は？」

「何死にはせぬ」

「はあ」

「はよう」

「え？何で！？」

「京に運んでやる。六波羅に出るよし、そこからは自ら歩くがよい」
六波羅のどの当たりなのか検討がつかないが、あいまいに頷く。

「てゆうか、濡れませんか？」

「うるさいのう、細かいことは抜きにせい」

「うわ」

ぐい、と。女神の力により引き込まれた。

沼の水に顔から突っ込む形となる。

「ぐふっ」

息を吸い込むのを忘れた。

少し苦しい。

「ほれ、行って来い！収穫期待しておるぞ！」

「ぎゃあああ」

時々。自分が生身の人間だと忘れられている気がする。
ぐるぐると回る水流の中、宗次はそんなことを考えた。

びちよびちよ。

そんな表現の態で、宗次は川のほとりに立っていた。

やっぱり…。

右から左に川が流れている。

下流はもっと大きな川か、海。

背後には山が迫る。

太陽の位置と影で、川上が北と知れた。

「ということとは…」

ぼんやりと、都の図を思い描く。

ここが六波羅だとすると、京の東側。目前の川は鴨川である。

後の山は東山か。

後方の山中に、伽藍が見える。

洛中は、この鴨川よりも内側である。

神職をかじる程度の宗次にも、巨大な結界が張り巡らされているのが分かった。

「さて…」

怪しい自分の姿をどうするか、戸惑ったが、とりあえず橋を渡って洛中に入ることにする。

女神も、細かいことだと言っていた。

「はは」

苦笑するしかない。

欄干ですれ違う人々に怪訝な目で見られることなど、瑣末なことに違いない。

「…そんなわけないだろ」

独り言は、むなしく空に逃げた。

宗次と女神と洛中の屋敷

……

袖から、裾から、髪の毛から。

滴る水を足跡に、宗次は京の道を西へ、北へと歩みを進める。

いまだ戦の痕跡の残る、御帝のおわす都。

飢饉や疫病、戦。幾度と脅威にさらされている、陰陽道に守護された都市。

人々の信仰は、新たな宗教に向き始めている。

疲弊し力を失いつつあるこの街で、新たに寺院が建つなどという事実があれば、それはたいそう歓迎されるに違いない。

だが、洛中に新たな寺院が建つたという話の裏は取れなかった。はるか南。

かすむ大気のさ中に、天に伸びる塔が見える。

広大な伽藍を持つ寺院がそこにあると知れる。

東山にも、愛宕にも、鞍馬にも、比叡山にも石山にも、伏見にも、高野にも南都奈良にも。

周辺に幾多の巨刹があるにも関わらず、新たな信仰は生まれる。不思議なものだ。

そこに救いを見出すと、人々の心はたやすく動く。

林太郎と幸次郎の父もそうだ。

蛇の祟りを受けた子を救いたいと、縁のある住持を頼った。
？

今、自分の考えに違和感を覚えた。

住持を頼ったのは、父親か？子の病を蛇神の祟りと教えたのは誰だ？

左官の父親は、どこの寺に仕事に出たのだ？

考えながら市中を歩いていると、荒廃した街並みと一線を画す屋

敷の塀が視線に入った。

土塀が、まだ新しい。

1町まるまる塀が続く様からして、そこそこの位階の高い貴族の邸宅に思えた。

門扉に警備の武士は立っていない。

氏姓もない。

かわりに、結界の気配がある。

林太郎の家で感じた、不穏な気配に似ている。

「あの、へつくし。お尋ねもうします」

通りかかった町人らしき男に声をかけた。

「この立派なお屋敷は、どなたがお住まいですか」

水にぬれた男をじっとねめつけ、しかし男は宗次を物乞いとも思ったのか、答えてくれた。

「このお屋敷に取り入っても無駄や。ここは、親王家にもつながる里見様のお屋敷やよって」

「サトミ…様…」

宗次は礼を言っ、一旦屋敷から離れた。

まさか。

ひとつ辻を下り、振りかえる。

「サトミって…まさか…」

里見という名の貴族が何人いるのかは分からないが。

これは偶然だろうか？

蛇神の又シ様の流れを組むサトミが神として祭られた村で、蛇神の崇りを受けたという林太郎。

洛中に仕事に出た左官の父。

新しい土塀を持つ、洛中の里見邸。

その里見邸に満ちる、あの住持と同じ気配…。

「まさかここはサトミさんの生家…」

確信に近い、その推理。

しかし、なぜ。

「なぜ林太郎が祟りに…」

今の宗次に組みたてられる推理には限界があった。

「よし。もう少し何か手がかりを…へっくし」

宗次は、鼻をすすり、里見邸を張ることにした。

夜陰にまぎれ、塀を越えられる場所を探した。

結界に触れば中にいる術師に侵入が知れるだろうが、捉えられる前に逃げられる自信はあった。

根拠のない自信ではあったが、女神の髪がお守りとなっているのは、なんとなく感じられる。

どうにかなる。

衣服の水気は、京都の湿気のせいかまだ生乾きだった。

水神の力が、まだ加護を与えてくれている気がした。

どこかで野鳥が鳴いている。

月の明かりはうす雲の中。

宗次は気合いを入れ、塀の外に飛び出した松の幹に手を伸ばした。塀を越えようとしたあたりで、パチリと何かの反発を感じたが、

無視して庭に飛び降りる。

視線を上げると、立派な庭園が目の当たりになった。

小さいながら、さすがに池まである屋敷となると相当高位の人が住む邸宅と知れる。

庭の様式までは分からなかったが、よく手入れされていた。

しかし、人が住んでいるのが信じられないくらい暗く重い、冷たい気配が感じられる。

バサリ。

何かの羽音が聞こえた。

「その男、お主、蛇の手下か？」

気づくと、池に伸びた釣殿に、紙燭を携えた白い狩衣姿の男が立っていた。

植栽に隠れて宗次の姿は見えないはずである。ましてや夜。月も

うす雲の中で明かりは乏しい。

にも関わらず、釣殿の男は間違いなく宗次に声をかけている。懐の中で、宗次はかたく女神の守りを握った。

「答えぬか？まあ、よい」

バサバサ。

羽音が近い。

「我が祖先の恨みは深かるうて。いつか我が血を絶やしにくると思
うておった」

上品な話し方をする男だった。

息をひそめる。

「まさか、誰ぞ御霊を祭り上げようとは思わなんだが、それはそれ
でこちらも身を守るまで……」
バサリ。

また、何かが羽ばたいた。

重たい羽音だ。

釣殿の屋根に、大きな影が舞い降りる。

ゆっくりと流れた雲の隙間から、月の顔がのぞく。

徐々に明るさを増す夜空に、鳥のような、梟のような、羽を持つ、
人の姿が浮かび上がった。

天狗か！

見るのは初めてである。

しかし、その形を持つモノを他に知らない。直感である。

「我が里見家は、平安の御世より天狗を信仰し庇護を得てまいった

……。地を這う蛇に、天空の天狗が倒せるかな……？」

恐怖とは。

宗次は呼吸を忘れた。

無数の影が、釣殿と言わず屋敷の屋根一面に舞い降りていた。

何匹いるんだ！

相手は神としてあがめられることもある霊験ある妖しだ。

人間の自分に相手ができる存在ではない。

逃げなければ。

女神様…！！

逃げようと腰を浮かす。

だが、均衡を崩し池に落ちてしまった。

生ぬるい池の水は、鉛のように重たい。

宗次はその場から動けなくなった。

「我が家系の繁栄を脅かす者は…死ね」

氷の刃のように。

男の言葉が飛んだ。

それを合図に、屋根の上の黒い羽影が飛び立った。

「つ…！！」

ばしゃん。

「…」

再び、全身ずぶぬれになった感を覚え、防御に構えた両腕をおそるおそる外した。

薄目を開けると、見知った社があった。

サトミの神社の境内だ。

「え…」

「おう、宗次。無事か？」

「め…がみさ…ま？」

そこには、男前な女神の破顔があった。

社の縁に立膝て座り、宗次の帰還を迎えている。

「お前うまいこと水辺にいたねえ」

そのセリフで、女神に救われたのだと分かった。

握りしめていた女神の髪が、いつの間にか無くなっている。

身に危険が迫れば、助け出される仕組みにでもなっていたのだから。
うか。

「どれ」

女神は縁よりふわりと立ちあがり、座り込んだままの宗次の傍らに寄った。

近付いた女神の白い手が、宗次の額に触れる。
貼りついた前髪を分ける。
と。

引かれた手のひらには、黒い羽根が握られていた。

「…鳥？」

「…天狗でした」

「天狗か…。どちらにせよ、天敵だな」

女神が、苦い顔になる。

「で？収穫は？」

「洛中に新しい寺は、やはり建立されていませんでした。ただし、塀を改築したらしい屋敷を見つけました」

宗次は、呼吸を整えて事の次第を話し出す。

「その屋敷から、林太郎の家にいる住持と同じ気配がありました」

「あの坊主、偽物か」

「おそらくは、林太郎の病も偽りではないでしょうか。この村に入り込むための…口実になっているかと」

「なぜそのように考える？」

「その屋敷、サトミさんの、生家でした」

「ほう？」

「どうやら、サトミさんの祟りを恐れてか、天狗と手を組んでいるようです…」

「ほほう。蛇神に差し出した一族が祖先の祟りを免れようかと？」

浅はかな、と女神の唇が動いた。

「天狗の力で、サトミの霊が神格化したと知れたか」

今までも、崇徳や天神道真、その他多くの御霊が祟り神となっている。

「林太郎の父上が、左官としてあの屋敷の改修に携わり、よい道しるべができてしまった…」

その宗次の解釈は、宗次の父自信が、林太郎の病の原因を運んだと読み取れた。

どこまでが偶然で、どこからが仕組まれたことなのか。そこまでは分からなかった。

事実として目の前に迫るのは。

「林太郎に呪をかけ、サトミの守護地に潜入したからには…」

「サトミを消しにかかる、かな」

「神を…殺すことは可能なのですか？」

「…だから、この時期なのだろうよ」

言外に、可能だと女神は応える。

今、サトミは出雲にいつて不在だ。

「林太郎の家で、林太郎の生气を利用し、僧にまで身をやつしサトミを消滅させる計画を練っておるのだろう」

天狗が。

天敵である水神を殺す。

「まだ準備が整っておらぬ様子を見るに、おそらく、サトミがひと月も早く里を空けるとは思っていないかたのだろうな」

「では、まだ何か対策を練ることができるのでしょうか」

サトミの子孫が。

祟りを恐れてサトミを殺す。

「私がサトミをみすみす消滅させるようなことがあると思うか？」
たまに。

ごくたまに。

女神がたのもしく見える。

今、宗次は、清廉な靈威をまとう女神を心から力強く思った。

女神と宗次と天狗の飛来

……

宗次は、もう一度林太郎の家を訪れた。

この日。京より帰った翌日のこと。

俄かに降り出した雨によって市は見世を閉めていた。

そのせいか、通りはいつそう暗く見えた。

相変わらず、読経の声と護摩焚のにおいがしている。

「また来なさったのか」

林太郎の父が、軒先で雨を凌いでいる。

宗次は目礼を返す。

「中に入られないのですか？」

「ああ、林太郎の毒気にやられてはならぬと心配されてな。中には入らぬほうが良いといわれた」

「あのご住持にですか？」

「ああ」

家族を締め出し、何をしているのかますます怪しい。

「失礼ですが、当宮の祀る神の性をご存知か？」

「…憤死した若い子供の霊とだけ」

それは、本庁に届け出た内容そのまま。

子供たちにも、多くは語っていない。

「実は、蛇神の流れをくむお方なのです」

父親の表情がこわばる。

「依代が人なので、蛇そのものではないのですが…」

「まさか。あんたんとこに行って何か悪さをしたのか、うちの子は」

「いえ、悪さなど。しかし、原因は我が神にあるのは間違いないよ
うです」

「若宮が悪いと申されるか！」

父親の声に怒気が混ざる。

「ですので、一因をなす我々にも林太郎の払いをさせていただきます
い」

「あの住持様では不足か？」

「元は我が社の問題。原因自らが払うと申しておりますので、お力
になれると信じております」

一時でもサトミを悪者にしてしまったことに気は引けたが、致し
方ない。

中に入るか、林太郎をこちらに引き渡してもらうか。

腰のひょうたんには、女神の沼の水、懐には女神の髪がある。

踏み込めば、道は開ける。

むしろに手をかけた。

ぱち、と。

洛中の里見屋敷で感じた結界の反発と同じ刺激が走った。

しかし、耐えられないものではない。

むしろをめくる。

むわ、と煙が通りに溢れ、雨に流されていく。

「愚かな」

中で、黒い影が立ち上がった。

むくりと起き上がるその影は、黒い袈裟を身にまとった坊主。

宗次に向き直ると、その足元に小さな火鉢と、横たわる林太郎の
姿があった。

「林太郎！」

声をかけても動く気配が無い。

「愚か、愚か。龍神のにおいがするわ」

あの時と同じ。

冷たい語気。

「お前何者だ」

「嘯くな、小僧。お主に何ができようぞ」

皮膚も黒く、ギラリと丸い目と赤い口だけが目立つ。

父親の目にも、それが異形の物だと知れる。

「我らが屋形様は、比良が次郎坊様の流れぞ」

名のある天狗を引き合いに出され、一瞬だがひるむ。しかし、だからといって何なのだ。

目の前の天狗は下っ端だろう。

力の無いものほど、虎の威をかるものだ。

「林太郎から離れる！」

宗次は、女神に言われたとおりに腰の水をまいた。

そして、女神の髪一房を投げ入れる。

次の瞬間。

「はっはっはっはっはっはっは！」

悪人然とした哄笑が響き渡った。

「私の目が黒いうちには、美童に指一本触れさせん！」

満を持して、女神登場である。

もう指の一本どころでなく触れられているような気がしないでも

ないが、女神がご機嫌そうなので何も言わない。

「さあ、天狗よ！我が逆鱗に触れぬうちに去るがよいぞ？」

女神の口上を聞き、天狗があざ笑う。

「この子供を苗床に、すでに道は開いた。お前一人で何ができる？」

「何？」

「今まさに、この地の土地神が入れ替わる時と知れ！」

言い終わると同時に、天狗が両の手を広げた。

途端、林太郎の周囲に黒いひびずみができる。

「林太郎！」

宗次は、思わず駆け寄り小さな子の体を抱いた。

女神は、口の端を持ち上げた。

小ばかにした態度である。

「なめてもらっては困る。私とて、龍のはしくれ」

ぞわりと、女神の半身が揺れる。

「小鳥が群れなしたところで、何ができる？」

きら、と女神の瞳が光った。

美童を見つめる時は別人の、神々しい光。

あまりの神気に息ができなくなる。

ひずみから、天狗の群れが飛び出した。

瞬時に部屋に溢れ、天井を突き破る。

羽が巻き起こす風に飛ばされぬよう、宗次はしっかりと林太郎の体を抱きとめる。

バリバリと木の屋根を打ち破り、ついには京で見たのと変わらぬほどの天狗が村の上空に舞った。

「女神様！」

「案ずるな、宗次」

女神はのどの奥で、笑う。

「この雨天に愚かなるは天狗よ」

すると、女神も空に昇る。

昇る最中、鱗が生え、足は尾になり、体は大きく、手足は小さく、銀の髪は背びれになっていく。

初めて目の当たりにする、女神の本性。

ごくり、とつばを飲み込んだ。

雷雲を背に、銀色の龍が大空を泳ぐ。

長さは三十間ほどだろうか。

鼻屑目にみても、美しかった。

龍が咆哮した。

すると、いくつもの光の筋が天から落ちてくる。

雷だ。

神の怒りとも称されるその雷光が、天狗たちに襲い掛かる。

圧倒的。

打たれた天狗が地に落ちる。

「笑止！この程度で我に挑むか！」

その様子を見ていた坊主姿の天狗が、悔しそうに顔をゆがめている。

宗次は、その天狗に

「あなたたちの寄り親に伝えなさい！」

言い放つ。

「サトミさんは、あなたたちの一族を恨んだりなどしない！この地であなたかく子供たちの成長を見守っているんです！」

「…愚かな」

「愚かなのはどちらですか！」

林太郎を苦しめ、サトミを追い詰めようとしている。

「比良の天狗の名折れではないのですか！？」

愚かなのは、祟りを恐れるばかりで供養しようとしないう子孫だ。

「女神様に殺されないうちに、退散なされよ！」

我ながら悪人のようなせりふだな、とどこか冷静な頭で考える。

「宿命ぞ」

天狗が僧衣のまま応えた。

「天狗と龍蛇は天敵の宿命ぞ」

その言葉が何を意味するのか、宗次にはわからない。
しかし。

「宿命だろうと何だろうと、この地から出て行ってもらうことなら関係ありません！」

強く、心から強く。

念じるように言葉をぶつけた。

「ふん」

宗次を鼻で笑い、僧衣の天狗はいったん空を見上げ、死屍累々の同族を見やり「ピュイ」と指笛を鳴らした。

女神の雷より逃れた天狗たちが、四散する。

「覚えておれ、小僧」

坊主も、ばさりと僧衣を翻すと天狗のなりとなった。

軽く床を蹴り、雨雲の空へ飛び立つ。

そして一斉にやって来た天狗たちは、あっけなく山の向こうへ消えたのである。

女神と宗次と夜陰の密談

女神は、雷雲を引き連れ、尾根向こうへ銀の体軀をなめらかに滑らせる。

光る雨脚は、女神の勝利を祝うかの如く。
見上げて、宗次は林太郎を強く抱いた。

美しい。本来ならば恐ろしい雷雨だというのに。

「…う…」

「林太郎？」

小さな子が、身じろいだ。

顔色は青白く、体に力が入っていない。

だが、のどが、声が、命をささやく。

「大事ないか？林太郎」

「…せん、せい」

「大丈夫だから、もう、大丈夫」

天狗に屋根を破られてしまい、雨が室内に降りこんで濡れている。
さっと視線をめぐらせ、乾いた衣装がないか探した。

「これを」

そう言っつて衣を差し出すのは、林太郎の父親だった。

「ありがとうございます」

謝辞とともに、衣を受け取る。

「いや、こちらこそ、林太を助けてくれて、ありがとう」

その父のほほに、涙が流れていた。

その後、林太郎の容体は回復しているという。

破壊された家屋の修繕がすむまで、親類の家に身を寄せているら

しい。

幸次郎が、嬉しそうにおしゃべりしている。

「あの、女神様？」

大楠の上から境内で戯れる子供たちを眺めながら、呼びかけられた女神は眼福至極。

とろん、と穏やかな表情である。

あの日、天狗らと同じく山の向こうへ消えた女神は、宗次よりも先にサトミの社へと帰ってきていた。

そしてやはり、まだ居座るらしい。

サトミの留守中に再度天狗が襲ってこないとは限らない、ともっともらしい理由を並べていたが。

「最近お加減もよろしいようですが、サトミさんがお帰りにならないまでいらっしやるおつもりですか？」

子供たちの遊ぶ姿を眺めたいがための、居候に違いないとはつきり分かる。

そういえば、女神の好みらしい子供が3人ほどいないではない。

「んー、そのことなんだけどね。せめて林太郎が全快するまではと
思っておるのよ」

「そうですか」

「天狗はしつこいからな。それに、京の貴族も気になるの」

「今回の失敗は、あちらに何らかの影響を及ぼしていると思います
か」

「大した影響は受けておるまい。下つ端の天狗しか使役できぬ術者
が一人か二人、怪我をした程度ではないか？」

その台詞に、圧倒的な力を見せつけた女神の雄姿が思い浮かぶ。

味方でなければ、戦慄したことだろう。

「女神様は、大丈夫なのですか？」

「ふふ、お前は相変わらず優しいね」

男前に足を組み、女神こそ優しく微笑んだ。

「しばらくは、美童が側におらねば力が出ぬ」

「…はあ」

女神らしい発言である。

どこまでが本気なのか、いつになったら判断できるようになるのだろうか。

サトミさんは、女神様の考えなんて手に取るように分かるんだろうな…。

はたと、宗次は自分の思考に苦笑した。

いつになったら、など。ずっと側にいる覚悟ができていいるのかな、俺。

「あー、私も麓に社を建ててもらおうかの」

「サトミさんがいなくなつて寂しいのですか？」

言つてしまつて、女神の滞在の理由がそれだと思ひ至る。

なぜ、気付かなかつたのか。

「すみません」

途端、謝つてしまった。

そんな宗次の姿を見下ろし、女神は息を吐く。

「なぜ謝る」

「え、あの、なんとなく」

「なんとなくで謝るな。悪い発言ではなかつたぞ」

「はあ」

「童でなくとも、宗次は好きだよ。サトミももちろん、好いておる」

「…ありがとうございます」

「まあ、サトミがおらぬから、いくら居つても怒られはせぬしな」

「…あの、問題がない程度にお願いいたします」

「はははは、問題とはなにを指しての事ぞ」

宗次もさすがに、大井の村の事や、美童が女神の毒牙にかからぬか心配したとは言えない。

サトミだったら、何度も女神を張り倒すのだろうか。

いろんな思いを心に留め、目を細めて女神と一緒に子供たちの遊ぶ姿を眺める。

とても穏やかな毎日。
少なくとも、サトミが帰ってくる神無月の終わりまでは。
女神とともにこの景色を見ていたい。
宗次はそう思うのであった。

.....

夜陰。

梟の鳴く声が、おどろおどろしく沈殿していく。
波の立たない池に、月光のように炎が映る。
足元に立つ紙燭の幽玄の灯。
熱を感じさせぬ、静かな揺らめき。

「御屋形様……」

屋根の上から、低い声が降ってくる。

釣殿に腰を据え、闇の中で酒肴をもっていた男がその声に応える。

「損じたか」

「面目ない」

「いや、好機であった」

「好機？」

「あちらの陣営、野の龍神と人間の男であった。収穫や」

「然様に」

「そちの手下、申し訳ないことをした」

「もつたいなく」

「にわかに正体が露呈してことを急いた」

「いつになく弱気な」

「ふ、この世で生きていくには、用心と慎重が大事なれば」

「してこの後は」

「さて、いかように攻めるか思案せなな」

男の微笑を含んだ言葉を聞き、屋根の上の気配は消えた。

それは。

宗次も女神も、いまだ知ることあたわぬ密談であった。

美童好みの女神の逸話、その語り2

……

蒼天。

昨夜の龍神出現の騒ぎは、吹き飛んだ家屋にしか痕跡を見出せない。何か特殊な呪でもかかっていたのか、龍神と天狗を目撃したという話も村人の口には上ることはなかった。

「先生、林のおうち、どうしたのかな？」

いつものように境内に集まる子供たち。

宗次は子供たちと一緒に戯れながら

「昨晚の嵐で、屋根に何か落ちたんだよ」

さし障りのない程度の事実を教える。

「ふーん？よくわからないや」

「この家はなんともなかったかい？」

「うちー？うん、ちよつと雨漏りしてたけど」

子供たちは今日も元気だ。

そして。

「今日はなんのお話をしてあげようね？」

「女神様のお話ー」

「女神様、好き？」

「先生が話してくれるお話は何でもすきー」

無垢な笑顔がその女神の心を和ませる。

きつと今も大楠の枝の上で、宗次と子供たちの姿を眺めているに違いない。

そういえば。

もうすぐ出雲からこの地の氏神が帰ってくる。

「女神様の話もいいけど、今度はここの神様の話をしてあげようか」

「本当？うちの神様だよね？」

「そうだよ」

「女神様とうちの神様、どっちがえらいの？」

「…」

どちらがえらい。

とは。

子供の考えとは常に面白い。

ちら、と梢の中の女神の気配を気にしたが、子供のためだ。

「ことたちを守ってくれているこの神様がえらいかなー」

宗次の答えに、ことはうれしそうに腕を上下する。

「本当？」

しかし。

宗次は考えた。

自分が知る神は多くいる。

もちろん、神話の神たちは雲の上の格であろうから、除外するとして。

身近な女神「夜叉」や「サトミ」、そして「ヌシ」は、やおろずの神たちの中でどんな存在なのだろう。

比良の天狗たちは神というより、物の怪の類のように感じる。

神、とは。

宗次の心に、かすかな疑問が浮かんだ。

宗次とサトミと女神の思い

もし、この世の人ならざる存在を分類することができるのであれば、できるか、できないか。

何を基準として。

そは神と。

こは鬼と。

境はなんぞや。

【美童好みの女神の逸話】

文月。

親月の、二日を過ぎた頃。

宗次はふと目を覚ました。

月の美しい夜。

ほとんど見えぬ星の代わりに白くやわらかな雲が月光を含み、風に身を任せている。

冴える感覚が、サトミの帰還を悟った。

若宮神社に奉祀される神。

かつて、土地の豊穰を祈願し生贄となり、実は実家より厭われた故の逐放という過去を持つ少年の霊。

憤死した霊は、若宮として神格を与えられることがある。

魂を祭り、その怒りを祟りに変えないために。

それが、宗次が仕える神だ。

「サトミさん？」

「…起こしましたか？」

「いえ、おかえりなさい」

神無月は神々が出雲へと集まる。

サトミも例外ではない。

「留守中、女神様がなにか迷惑でも？」

聡いサトミの静かな問いに、臥所から起き上がった宗次は苦笑する。女神は、サトミに会うことなく先月の終わりに大井村に帰っている。だが、やはり女神の濃い靈気が残っているのだろう。

「いえ…女神様は問題なかったんですが」

言いかけて、話題を変える。

「サトミさんこそ、出雲はどうだったんですか？」

「新参は、外宮にも近寄れぬ。国境で、高みにおわす神々をお迎えするだけ」

「退屈でしたか？」

「…いや？かつて我々が抛り所としていた神々は、こうも人間的かと妙に安堵してしまった」

サトミは宗次の寝所に作られた床の間に腰かけた。

「安堵、ですか？」

「女神様が、あのような方だからな」

サトミの言いように、宗次はまたも苦笑する。

「サトミさん…」

「なんです」

「神とは、どのような存在なのでしょう」

宗次の問いを、サトミは無言で受け止める。

自身の存在を問われているのか、高みにある神話の神々の偉大さに言及しているのか判然としなかったからだ。

「少なくとも、人に関わるものではない」

サトミは静かに応える。

「存在はそこにあれど、我々は地のものではなく、天のものでもない」

「…天狗が…」

「ああ、この匂いは天狗のものであったのか」

宗次の言葉を拾い、サトミは庭の彼方、村を見た。

「天狗が村に入り込んだのか」

「…サトミさんは、御霊になるのでしょうか」

「？脈絡なくどうしたのです」

宗次は、天狗と京にいた貴族の姿を思い出す。

神となった先祖を消そうとしたあの一族を。

「御霊とは、高貴な方々を祭るもの。謂われなき罪に貶められ、恨みをもつて神となったものぞ」

「……」

「そなたは、私をどのように思うてか」

サトミの死した過去を思えば、子孫の家系を照らせばそうともれろと考えていた。

「ここは若宮。私の魂は、霊魂ではなく”意思”である。女神様に

添い、その神格を得たにすぎぬ」

直接的ではないが、サトミは「否」と答える。

「どうしたのだ？何があった」

一重の、美しい月のような目が細められた。

霞のようにわずかに。

穏やかに空気を揺らしてサトミが座に腰を据えた。

「天狗の存在が、私の何に疑念を抱かせる？」

宗次は息を飲んだ。

サトミは、以前から聡い子供ではあるようだったが、神になってからはその威厳が増した。

500年も前に命を落とし、女神とともに「生きて」いたのだから当然と言えば当然ではあるが、正に今は別格である。

宗次も床に正座し、サトミと向き合う。

「…実は、村に天狗が忍び込んだのです」
「うむ」

「その天狗、比良の天狗の流れを組んでいると申しました」

「比良？比良は近江のはるか遠方。比良からこの地になんの用ぞ」

「京の、とある貴族の屋敷に若い男がおり、その方に使役されているようでした」

「天狗が人間に使役されると？加茂か？土御門か？いや、比良なれば比叡か？」

「いえ…その貴族の屋敷は…」

言い淀む宗次の表情を見て、サトミが先に言葉を接いだ。

「まさか、我が一族か」

さすがにサトミは理解が早かった。

そして、苦い顔になる。

「我が一族が天狗を使役しこの地に何をしに来たと言つのです？」

臥所の中にまで、小鳥のさえずりが聞こえてきた。
夜が明けようとしている。

………

森の空気は沈殿している。

人の立ち入らぬ山の奥深くは、下生えの細い草木がわずかな木漏れ日を求めて懸命に枝葉を伸ばしている。

谷を抜ける風が、空を渡る雨が、森を支える。

多くの命が山に息づく。

しかし、その沼には何もいない。
蛇神たちを除いては。

「のう？夜叉…」

又シは珍しく女神の沼に滞在していた。
さらに珍妙なことに、女神に優しく接している。

目じりに向かって細く上向きの、長くやわらかなまつ毛に縁取られた目。

清流のように流れるつややかな黒髪。

やわらかで、丸みを帯びた肩。

四尺と少しの小柄な体に、腰巻と簡素な羽織姿で、白い足には履物はない。

稚児の姿ではあるが、本性は蛇。

女神好みの美童の姿をした又シ。

いや、又シのような美童を好む女神といった方が正確か。
「なんですかあ？又シ様」

そんな又シが側にいるのだ。女神の機嫌もすこぶる良い。
声が鈴のように転がる。

「お主、天狗と揉めたな？」

「はい？」

「とぼけるでない。鳥の匂いがする」

「いやだなー、蛇なのに鼻がきくんですね。それに仲良くお話した
だけかもしれないのに」

「ふざけるでない。何故天狗どもと揉めた」

「だから、揉めたってほどでは…」

「あの童か？それとも稚児の霊か」

「あ、そうそう、サトミの出雲参向はいかがでしたか」

「今はそちの話をしておる」

怒気を含む又シに、女神は肩をすくめた。

「なんです？何をそこまで気になさるのですか」

「夜叉」

女神の名を呼び、又シはしっかりとその意識を集中させる。

「そちは、自身を分かっておらぬのか」

「私をその名で呼び続けるのは、あなただけです」

「夜叉、そちを知るものはや我だけである」

「そうですね。私も、あなたと私だけの絆は大切にしているのです
がね」

「では、大仰な真似をするでない」

「私からサトミを奪うような真似をされたのは、又シ様が私を守つ
ての事とおっしゃりたいのでしょうか？」

「や、と。」

女神は卑屈ともとれる笑みを浮かべた。

「そもそも、あなたが長くこの地を離れていらっしやるから…、サ
トミに浮気してしまうのです」

「また詮無いことを…」

「サトミが消されるようなことがあれば、私は天狗ごとき敵にして
も怖くない」

力強い意思に満ちた言葉。

それはまっすぐで、偽りのない気持ち。

「夜叉！」

又シの、叱責に等しい呼びかけを振り払うように。

女神の言が重なる。

「それで私が消えても構わない！」

「ならみ合っただまま、数瞬。」

「もっと早くに、帰ってきておればよかった…」

息とともに又シは言葉を吐いた。

「…申し訳ありません。感情的になりすぎました。別に、又シ様を
責めたいわけではないのです」

女神も、うつむいて視線をそらした。

女神と又シと京の男

……

翌朝。

田植えの終わった瑞々しい水田が、大井村のあちこちに点在するようになった。

早苗のか弱い葉が風に揺れ、水面に影を落とす。

本来の又シの帰来を分かっているのか、いつになく穏やかに成長する作物。

平穏そのものである。

山の木々たちも、動物達も、精気を得たように活発である様を、村人たちもわずかながらに感じていた。

「又シ様の機嫌がよいのかねー」

「今年は村にいい恵みがあるのかね」

期待に満ちたそんな会話を、又シと女神は沼で「聞く」。

「やはり又シ様が要所要所に居られると、村の息吹が彩りを増しますね」

「…そうだな」

「今年は日照らぬと良いのですが」

「…そればかりは、天照の御心のままにであるからのう」

「又シ様…なんか避けてます？」

目を合わせようとしない又シの顔を覗き込むように、女神は背をかめた。

「昨夜の事、まだ気になさっているのですか？」

「…いや、いろいろ考えておるのだ…」

「何を」

「どうしたら、お主と天狗が争うことになるのかと。口を割る気はないようだからの」

女神は苦笑するしかない。

言いたくない訳ではないのだが、言えば、又シも口を出すに違いない。

それは、避けたい。

「天狗は我々蛇の天敵…。神と等しく祭られもする偉大な妖怪ぞ」

「気になりますか？」

「サトミ絡みであろう事は察しがついたが、まだ神になって間もなきあの稚児の霊が、天狗と因縁を作るとは思えぬ」

小さき手を顎にあてがい、又シは思案する。

伏された瞼の奥で、深黒の瞳がきらりと光る。

「美しい…」

女神など、うっとりしすぎて感情を声にだしてしまう。

「お主という奴は…」

女神のそんなつぶやきに辟易し、肩を上下するほどにため息をつく。そのため息は、森の梢を抜けやわらかな風になるかと思われる程に美しく、繊細に見えた。

もちろん、女神の目だけにだが。

「お主一人の手に終える話で終われば良いが、眷属ばかりでなく土地に害が出るような事にはしてくれるなよ」

又シは、女神の邪な感情を払拭するかのように、厳しく諭す。

「この土地は我守護地である前に、人の大切な生計の場ぞ」

「分かっております。大丈夫です。天狗に悪さなどさせません」

「…不安でならんわ…」

穏やかに。

平穏な時間が過ぎていく。

……

平安の都。

かつてそう呼ばれた京。

飢饉や戦の場となり、また疫病も重なりかなり衰退してはいる。

源平の戦の後、鎌倉に政治の場が移ってなお、その影響力は大きい。院政のしかれた朝廷によって、陰も陽も飲み込むほどの巨大権力が築かれていた。

鎌倉新仏教の台頭も、この地までは及ばない。

天台、真言と多くの荘園領地を持つ二大宗派が、強い支配体制を持ち続けていた。

「平安とはなにかな」

釣殿で酒を嗜むのを好しとするその男は、誰にとも無くそうつぶやいた。

控える侍従もなく、ただ一人杯を口に運ぶ。

うららかな日差しが、池の水紋を彩る。

それを肴に、呑む。

「惟周殿」

衣を引く音とともに、軽やかな女の声が背後に迫った。

男は顔だけ振り返り、

「政所様」

と応じる。

政所（奥様）と呼ばれ、女性は無表情の中に嫌悪を示した。

まだ若い。

惟周の二つか三つほど年上だろうか。

女盛りの、源氏物語に出てくる葵の上のようだ。

「病と申し参内もせず、何をなさっておいでか」

「酒が飲みたくてしかたない病なのです」

「殿がおらぬようになれば、そなたがこの里見家を支えねばならぬというに」

「子を成されぬのは、私を次期家頭とされるためですか？」

カッ、と。

政所の顔に朱が走った。

惟周の嫌味が効いたようだ。

政所は後妻で、妙齡の惟周の父親との間には子はない。

夫との寝屋を政所が避けていると、家中ではもっぱらの噂だ。

この家には、家禄を継ぐことのできる男子は惟周しかいなかった。

「もしもの時は、幼い妹に婿を取られればよろしいかと」

惟周は、さらに嫌味を重ねた。

「殿に言いつけますよ！」

政所はそう言い捨て、顔を真っ赤にしたまますぐさま踵を返した。

政所が憤慨して去る様を、惟周は哄笑し眺めた。

「何ゆえに、疎む私に話しかけようとするのかな」

「それは、御屋形様に好意を寄せておられるからです」

屋根の上より、低く進言する声。

影を落とさぬ、異形の供がそこにある。

まだ家督を継いでいない惟周を、「御屋形様」と呼ぶ。

「私を好いていると？これはまた異なことを。あのような態度で、

どうしてそうとわかる」

「思い通りに自分を好いてくれぬ男子に、女子はあのような態度を

とるものです。政所様のように気位の高い方なれば、なおのことか

と」

「そちは、人の機微をよう解釈するよの」

くく、と喉の奥で笑いを殺し、惟周は何杯目かの酒を飲み干す。

惟周の、真黒の瞳が満足気に揺れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8948m/>

美童好みの女神の逸話

2011年10月15日04時11分発行